

# Lapis Lazuli

文芸部誌 七夕号

20  
25



## 目次

### 【cushing】

【cushing】	白砂糖	……三
ウメヒメ	明倉有斗	……五
ゆらぎ、微熱	霧雨 蒼	……八
帰郷	菅原きらり	……十三
社畜	d f g	……二十一
ニューデイズ	宵蘭	……二十五
食い意地	海葵	……二十六
掃除時間	午睡乃 ユメ	……二十七
都会の歌	午睡乃 ユメ	……三十
出会った意味がなくなるまで		
犧 まい	……三十一	

### マザコンララバイ

犠	まい	……三十三
放課後	わゐん	……三十五
わさび再び	わゐん	……三十六
生きてばかり	霧雨 蒼	……三十七
あなたが大好き	明倉有斗	……三十九
プラットフォーム	上	
カール	……四十六	
Darker Darker Darkest		
ナパーム焼き炒飯	……五十四	
Fuck the 自称表現者		
去私 a.k.a 長岡雅也	……六十一	

あとがき  
編集後記  
文芸部情報

……六十三  
……六十五  
……六十六

## 【crushing】

白砂糖

2時間目が終わった中休み。外に遊びに行くのにも寝るのにも短く、復習をするにははかったるい。そんな一介の高校生にはどうにも持て余しがちな20分間を俺はもっぱら親友と話すことに費やしている。

時に花の植え替え方、時に最近流行りのテレビの話、時にチーンソーの使い方、時に彼女の作り方、忙しない教室の隅でとりとめも意味もない話をするこの20分間を俺は割と好んでいた。

そんなある日の中休み。

「いったん死んだら人生やり直せんかな。」

「どした？」

Q. 友人が病み始めました。どうすればいいですか。

A. 落ち着いて話を聞いてあげましょう。

何処かで見た記憶の中の相談窓口の回答通り、いったん話を聞いてあげることにした。が。どうしよう。俺はその道のプロでもないし、こいつが何を言っても受け止めるしか能がない。まあ聞くくらいなら、いいかな。

「今日の数学中ずっと考えてたんだよ、死んだらどうなるのか。

魂がね？」

「おん。」

宗教、野球、政治。の宗教。

ここで会話していいのかその話題。居酒屋でしたほうがいいやつ、と思っただけまあ。20分間の戯れカウンセリングだから。いいか。

「んで、死んだ魂は輪廻転生するんじゃないかって思ったんだ。でも輪廻転生っていつても最後があるだろ？ 世界が終わって宇宙の生命がすべてなくなったとき、その魂ってどこに行くんだろう……っていう疑問が発生したわけ。」

「はあ。」

「そこで、人は死んだらそいつの人生の一番最初に戻るんじゃないかと思っただ。」

「エンドレス？」

「そうエイト的な。そう思っ、じゃあもう1回やり直したいな。」

「人生？」

「そう人生。」

「なんかあったん？」

「なーんにもー。え、病んでねえよ俺？ ごめんね心配させちゃってたら。」

「つつつつつつなんなんだよ紛らわしい。」

まされた。やめろ。

親友の人生に興味はないといいつつも少し安心している自分に、小学校2年生で捨てたはずの人を思いやる気持ちがまだ残っていたことに感動した。

そんな俺の顔を見て何か吹っ切れたような顔になった親友は大きな口をあけてひとしきり笑って、それから急に真剣な顔になってこう言った。

「…………お腹の中に蝶々がいる、って言ったら？ ……しかもお前に…………？」

「え、宗教!？」

カムバック阿弥陀如来か。輪廻転生の話は終わった感じの空気だったのに。

「ちーがー。お前そういうとこだよ…………もうほんとに！」

とうとう爆笑し始めたそいつを見て少し恥ずかしくなった。

「なに？ 腸ってこと？ 小腸!？」

「あはは、ばあか!！」

「それか昆虫食でもしたんかお前!？」

「あつはつはつは!! つあ、」

チャイムが鳴った。

急いで席に戻る生徒。机を引く音。スライディングで席に帰ろうとして失敗し、ほかの人の机も巻き込んで転ぶクラスメイト。それに爆笑する丁度来た教師。隣のクラスのあいさつの音。親友の机の方を見たら、目が合って、ぱちんとウインクをか

ウメヒメ

明倉有斗

ウメヒメと呼ばれている女がいるらしい。

昔話に出てくる化け物とか妖怪みたいな響きの名前だなど思った。

クラス替え後、初めて入った新しい教室の中はまだざわざわと騒がしくて、色々な人が近づき合ったかと思えばすぐに離れたりして、えー！お前も一緒なの、やばー、みたいなテンションの高い女子の声が時々響き渡っていた。

自分の席をさっさと見つけて座ってしまった後、特にやる事もなかった僕は机の下でこっそりとスマホをいじっていた。運よく後ろの方の席なので、先生が教室に入ってきたとしてもすぐカバンにしまえばバレやしない。

あまり面白味のない時事ニュースをさかさかとスクロールしながら、時間が過ぎるのを待つ。今日のスケジュールは始業式とざっくりとしたオリエンテーションだけなので、午前中で全て終わってしまう予定だった。

それにしても、なんとなく腹が減ってきた気がする。持ってきたおやつでもこっそり食べようかな、なんて思っていると、

教室の中央辺りで固まっていた女子たちがまた甲高い声を出した。

「あれっ、ウメヒメじゃん！同じクラスだったんやー！」

ウメヒメ？ 奇妙な響きに思わず顔を上げる。たった今教室に入ってきた、地方妖怪みたいな名前で呼ばれたであろう人物の姿は、丁度他の人に被っているようで僕の角度からは見えなかった。

ウメヒメ。埋秘め？ウ・メヒメ？再び目線を手の中の液晶画面に落とした僕は、その言葉を頭の中で色々な形に変換してみる。どれもしっくりこないな、と首を捻り、検索エンジンを開いて、既存の単語なのか調べようとする。

と、隣の席の椅子が引かれた音がした。すぐ近くから鳴った床と金属の摩擦音に、反射的にそちらの方を見る。

丁度、隣の席に一人の女子が座るところだった。黒髪をふわふわなウェーブにして、制服のシャツの襟元を大きく開き、雑に着崩している、派手な感じの人。彼女が僕の視線に気が付いて、唇を緩める。

「こんにちは、あたし、ミチ。よろしくねん」

ふにやふにやと、力の抜けたような声だった。

「よろしく」

簡単にそう返すと、彼女は自分の鞆をガサゴソと漁り、そこから取り出した何かを僕の方に差し出す。赤いパッケージ。

「……何？」

よく見ると、それはコンビニなどで売られているカリカリ梅の袋だった。種無しタイプで食べやすい！という文言が、ポップなフォントで印刷されている。

お近づきのしるし、と笑う彼女を見て、思わず口が動く。

「……梅、姫？」

彼女はきよんとして、

「何であたしのあだ名知ってんの？」

と不思議そうに言った。

なるほど、梅が好きなお子だから梅姫ってことか。

つい笑ってしまう。けれど、そういうことなら僕にだって言いたいことがある。

僕は自分のカバンからさつとアレを取り出し、目を丸くしたままの彼女に向かって、それを突き付ける。

「悪いけど、僕は種アリ派なんだ。生まれてからこの方ね」

今朝学校近くのコンビニで買ってきた、カリカリ梅、種アリバージョン。

食べ応え充分！と力強い書体で袋に印刷されたそれを見て、真ん丸だった彼女の瞳が、ゆつくりと半月のような形になった。





ゆらぎ、微熱

霧雨 蒼

同じ夢を見ている。正確には全く同じというわけではないのだが、背景だけがひたすらに移り変わっていく、じりじりと下焚く夢が、私を圧えつけている。鏡や硝子に反射した自分を見ればいつも、大層時間がかかったであろう薔薇色のお化粧が凹凸感のないキャンバスの上にしれっと乗っている。そうして、気が付けば目の前の男性と他愛もない会話をしている。変な間の悪さ、妙に緊張して口内が乾燥して、静寂を誤魔化すためにテーブルにある克蘭ベリージュースを体内に送り届けてみたり、ぱつと視線を逸らしてみたり、する。話したはずの内容だとか、相手の顔だって、瞼に光の刺激が来たときには泡沫と化している。そんなものだから、夜は酷く冷たくて朝は意地が悪い。

眠りにつく前、毎夜彼のことを思い浮かべる。もしかして、彼は本当は私と同じように実在していて、私達は夢を媒介にして突き合わせているのではないか。名前のつかない関係性のままで、異なるシチュエーションで見て呉ればかり取り繕って、何も進展しないことを良いことに同じ頁ばかりを繰り返している。引いている白線を踏み越えることはとても難しいから、

薄い壁越しに互いを見透かそうとして、見透かせないことに安堵している。どうせ全てが微睡みに落ちていくのだから何をしたらって許されるのだけれど、何もしないことが心地好かった。顔も名前も知らない誰かは蜃気楼のように揺らぐ。ミルクをぶち撒けてしまった羊を数えていけば、今宵もまた逢瀬が訪れる。フェードインしてきた人工的な暗闇が部屋全体を包みこんだ。目が慣れてきたところで、強い光がスクリーンに映し出される。後ろの席に座っているから、耳に入る電子音は予想していたよりもやや上品さを携えて鼓膜を震わせる。見たことも聞いたこともない作品は彼が選んだものだったか、それとも私が選んだのか定かではない。左手でポップコーンを取ろうとする。と彼の右手と勢い良く衝突した。謝罪が口をつこうとするも、すんでのところで熱を帯びた空気と溶け合ってしまった。出かかった言葉は解れて、初々しさ、美しさ、弱さ、ほんの少しのロマンズとあどけなさを隠し味に出来上がった見せしめが遮っていく。そのくせ私の睫毛はマスカラを塗っていたって中途半端な長さで、どんよりとした沼みたい、つまらない瞳をしている。口下手なくせに目で語り合うことも出来ないものだから厭に恥ずかしくなる。彼の瞳は闇の中でも透き通っていて、じつと見続けていれば何処かへと連れて行かれてしまいうさだ。眩しい光の横で、彼が僅かに口角を上げたような気がした。奥歯にへばりつくような、キャラメルのかんたうい香りが鼻へと抜

けていく。耳をすませれば、周囲から降り掛かる音声の中に一際小さな呼吸音がある。一面を覆い尽くすスクリーンに光芒が伸びて、綿菓子よりは重みのある椅子に凭れているのがやけに落ち着かなくて。観客は中央部に座っているのが大半で、後方には私達しかいなかった。恐らく最後方にだって誰もいない。私達の背中を眺める人物はこの空間に一人として存在していなかった。エンドロールが流れる頃、最後の最後まで辿り着いたのかは覚えていない。ふと意識が顔を出したときには陽もせつせと昇り始めていた。タイマーをかけていた冷房はとうに切れていて、背中にはじつとりと汗が滲んでいる。ぼやけた視界は彼の顔の有り様と同じで、いつも目覚めは狐につままれたような気分である。

「うん、気持ち悪いね」

目の前の友人は切り捨てる。すっぱりと物を言うことが彼女の長所でもあり短所でもあることを私は知っていた。この場合どちらに働くのかは誰も知らないのだけれど。ただ、私がこうして相談事を出来るくらいに信頼を置いていることは確かだった。

小麦粉とバターを折り重ねた生地がふつくと薄く連なつて一つの皮を成している。フォークを入れる度、落ち葉を踏み

付けたときのようにハラハラと散っていつては原型を留めようとしなない。間にはもったりとしたカスタードがこれでもかと言うほどに挟まって、頂点ではつやつやに照り輝いた苺が存在感を出している。繊細に舞っている雪はそのうち融けてしまうから、今のうちに景色を楽しまなければならない。段々と層になった生地が崩れる様はいとも容易く儂いものだから、大切に食べなくてはならない。

「全くの見知らぬ人が夢に出てくるのがそもそも疑問だし、それを受け入れているのも私には理解し難い」

ティーカップに入ったダーズリンには彼女の姿が鏡合わせになって映っている。夢での逢瀬は一週間に一度ほどのペースだが、いつしか二ヶ月ほどが経とうとしていた。進みも退きもしない、パラレルワールドのような夢を繰り返している。不思議と充足感があるのは、私が現実世界に対して何かしら不満を持っているとか、欲を満たしたいとか、きつとそのようなことではなくて、単に彼が私を尊重してくれているような気がするからであった。もつともそれは私の惨めつたらしい勘違いであるかもしれないが。

扉を押さえて私を先に通してくれるとか、履き慣れないヒールを気遣って歩きやすい道を選んでくれるとか、常に車道の方を歩いてくれるとか、私の体調の変化にすぐに気が付いてくれるとか、一言で形容するならば彼は紳士だった。随分

と大雑把な括りにしてしまうのも躊躇われるが、何せ覚えていることが断片的すぎるのだから仕方がない。面倒くさいと思われることは何一つなくて、面白みと新鮮さに揺蕩っていた。取り留めのない彼への興味関心は出会う度に細く縊り合わさって、わけもなく私をぎちぎちと縛り付けていた。

けれど、私の夢なのだから、彼が私にとって都合の良い人であるのは当然のことなのかもしれない。良い人と言うのはその人にとって都合の良い人であって、身勝手な期待を火に焚べているのだ。何も言わなくても許される時間というものを薪にして、相手に見初められようという努力もせずに、随分といい加減な時間を、私にとつては楽な時間を、ぬるま湯にどっぷり浸かっているような蕩けた幻想を夜ごと脳内で巡らせて、それは蠟燭の揺らめきや小川のせせらぎ、心拍リズムと似通っていて――何ともみつともない。胃もたれのようなむかむかした心地が上がつてくる。私は私の図々しさも痛々しさも狡さだつて疎ましく悍ましく、日々自己嫌悪の波に襲われているのだ。

「……夢の中がどれだけ良かったって、あんたは現実世界の人間なんだからね」

目を丸くする。真剣に説く友人が何だかおかしくって笑ってしまった。そうね、そうね、私はどれだけ足掻いたって、現実世界でこうして水中に溶け込んだ僅かな酸素を肺に取り込む魚なのね。今日の夕焼けは熟れた苺よりもとずっと紅く、

光が雲の切れ間から差し込んで暖かな空気に滲んでいく。橙色をした靄は薄らとたなびいて、そっと木々を撫でていく。焼け爛れ、あるいは大火事、それとも鮮肉、薔薇。夜の気配が刻々と色を濃くしては染め上げる。硝子越しに見えた景色は無慈悲に美しく、私はじわりと視界を歪めた。嗚呼、ダージリンの風みたい水面を湛えられたら良かった。私は彼女の素直さを羨ましく思う。

ここでの私は、クランベリーが好き。ラズベリーよりも酸味が強くて、加工してあげないととてもじゃないが食べられない。宇宙の香りがラズベリーならば、夢の香りはきつとクランベリーなのだと思う。意地悪だと、思う。我が儘を言ったり癪癪を起こしたりしたって許されるのだろうが、それだけの度胸がないことは私が一番よく理解していた。それが尚更私を惨めにさせて、可愛げのない女だと、聞き分けの良いことは必ずしも好機には働かないのだと、今更ながら、抉られた胸を押さえて、じくじく流れ出す哀愁を秘めている。遠慮は自傷になって、後悔ばかりが降り積もって、身悶えするほどの雪山を作る。

気が付けば、彼がタルトを買ってくれていた。どうしてだろう、と疑問が頭を過つたが、理由なんてどうでも良かった。どうせ買っただけと言えたわけでもないのだし。ただ只管に、

眼前のナパージュを目にして、歪んだ私の姿が映ったフォークを手に取る。獣の爪のように鋭く先が尖っていて凶器のようにそれは煌めく。頭上のライトはぼんやりと暖色を帯びていて、どこもかしこも落ち着き払った洗練さを纏っているものだ。克蘭ベリージュースは以前彼と共にしたカフェのものよりも酸っぱくて爽やかだけれど、タルトの甘さで帳消しにされている。すつと刃を入れれば果肉の繊維がみちみちと潰れて、中に詰まっていた水分がじゅわり漏れ出す。こんがりと焼き上げられたクレームダマンド、滑らかな舌触りのカスタード、欲を言うなら、もう少し隣の席との間隔が空いていれば万々歳。彼はどこまでも献身的なもので、私の罪悪感をついと突く。買いかぶられていてのではないか、上品な糖衣でコーティングされた私は舐めたら大層苦いに違いない。強すぎる光で焼け焦げた胸から白い煙が立ち昇って、泥沼に腐った瞳を乾燥させていやらしい。あまりの眩しさが厭になってしまふのに、醜さが浮き彫りになった私が哀れに思えるのに、炎は未だ鼓動することをやめない。消そうにも自力では難しくて。ゴミはゴミ箱に捨てねばならないし、使ったものは元の場所に戻すのが礼儀で、つまりは貴方が着火してしまった火は貴方が責任をもつて消していかなければならないということだ。蟬はたらりと融けて伝っていく。この蠟燭が全て燃え尽きてしまったとき、私達は互いに逆向きの電車に乗って、ずっとずっと遠くまで行くのだろう。レール

の上の懺悔も後悔も轢き潰して、痛痒い水膨れもまつさらになつて、いずれ灰は灰になる。

意味もないのに固めた上辺だけの純粹さが崩れ落ちていく音がする。耳元でごぼごぼと泡が弾けていって、私の感情も葉を付けずに虚ろになる。同じ頁を捲り続けていたとて、伸びきった髪も小じわの増えた皮膚も二度と戻りはしない。貴方は心配そうに私を見つめていて、その残酷なまでの優しさが、真っ白なハンカチに包まれた温もりが、また私を腐らせていくのだ。私は貴方と一緒にいて良いのだと、そう思わせてくれることが、それ自体が、鏡の奥にまた鏡を見るようで、終末のないエンドロールの如く思われる。何かにつけて行ってきた引き伸ばしはいつしかやめにしないといけないと分かりきっているのにどうにもならないことをどうにかしようとして、ここなら人間のままでいられるからと、身の丈に合わないものを飾り立てた。揺らめく炎の切っ先は周囲の空気までもをぼかし上げるけれど、淡雪は淡いままで。これから蒸し暑い夏が来たって、亡骸を隣に羽を震わせた蟬がけたたましく叫んだって、若葉の香りが猛々しく風に乗って運ばれてきたって。仄仄と燻っていく。微かに明暗のさざ波を立てて、爆ぜた火の粉を灯りにして、闇を溶かす。貴方は、無辜。

朝日が昇っていた。頬にいつものような熱はなくて、むしろ冷たさが支配していた。ひとり、手を当てると、ひんやりと濡れる。カーテンの隙間から伸びた光芒は、いつかのスクリーンよりも歪で麗らかに見える。意地の悪い朝が、むっとして、噎せ返るほどの白々しさを携えてはまたやって来て、鈍色の室内を無理矢理蜂蜜色に塗りたくっていく。腕を伸ばして下卑た声をあげて、鏡に映る私は瞼に鉛が乗せられているようで、のっぺりとした造形に拍車がかかっている、重苦しく自嘲した。薔薇色のお化粧なんて、これっぽっちも似合わない。朝の空気を吸い込むと、東雲が肺胞をずたずたに、これでもかと傷付ける。陽光はミルクを温くするからいけない。

使い古した日記帳——所々にある紅茶の染みから目を逸らしつつ——を開いて、真白な頁を探り当て、インクの染みを作り上げてみる。今度はミルフィーユ、それも苺がぎゅぎゅっと詰まったナポレオンパイが食べたいです。童心に返ってゲームもしたいです、写真も撮りたいです。本当は薔薇よりブルーゲンブリアの方が好きなんです。お化粧品を見繕ってほしいです、貴方が詳しくなくても、私に似合いそうだと思ってくれたらそれで。

そのうち染みがいくつも出来る。紙が塩辛くなりそうで、困ってしまう。顔を両の手でぴったり覆って、掌の中に擬似的な夜を作り上げた。ちらちら瞬く星達は苛烈で、悪いのは私達で

はなくて。頁はやっぱり捲れなかった。貴方が実在していたとして、私達は出会わない方が良い。鐘の鳴らない灰被り。夢は御伽噺たり得るのだろうか。この微熱が冷めやらないどころか、激しく燃え上がってしまったとき、もう二度とお目にかかりません。

## 帰郷

菅原きらり

帰郷とは、こうも物寂しく陰鬱なものであっただろうか。電灯の消えかけたトンネルの中、私は考える。足を一步踏み出すたびに、電灯が瞬く。まるで来るな、と拒んでいるように。私は懷中電灯を握りなおし、再び足を進める。帰らねばならないのだ。朽ちゆく故郷を、この目で見ねばならないのだ。

志賀戸村は〇県の山中に存在した村である。市町村合併の折に村という呼称は廃止されたが、住民たちは依然ここを志賀戸村と呼んでいた。はつきりとした人口は記憶していないが、おそらく五百は切っていただろう。実際はもっと少なかったのかもしれない。なにせ、廃村になったのだから。山奥に位置するというだけで不便な上に、店らしい店は一軒もない。人口のほとんどを高齢者が占め、村の小学校の児童は五十人もいなかった。その子供たちも進学とともに村を離れ、その家族も村を出て、後に残るのは老人たちだけだ。九十代の両親を七十代の子が介護するような有様では、村の存続など不可能だった。他所に住む親族が老人たちを村から連れ出し、頑固にもこの地に拘った者たちはここで生涯を終えた。こうしてこの村は廃村と相

成り、今に至る。

かくいう私も、この村を去った子供の一人である。理由は進学のためだけではない。小学校を卒業する年に両親が離婚し、私は母に引き取られた。その後、母と私は父の故郷である志賀戸村を離れ、私は市内の中学校に進学した。とても円満とは言い難かった我が家の状況はすぐに村に広まり、私は二度とこの地に帰ることはなかった。ではなぜ、いま私はこの村に戻ってきたのか。私を知るものが死に絶えたからではない。郷土愛などというものでもない。ただ、幼い日の私を恐れさせ、惑わせ、苦しめたこの村が死ぬ様を、この目で見たいと思ったのだ。私はこの村が大嫌いだった。不便さなどどうでもよかった。ただこの村を取り巻いていた雰囲気、この村に住んでいた者たちの性質が、憎らしくてたまらなかったのだ。その忌々しい村が滅んだとなれば、見てやりたいと思うのが私の性分である。思い切り嘲ってやりたいのだ。ざまあみろ、と腹を抱えて笑いたい。私を苦しめたものは実に下らなかったと、そう思いたいのだ。

トンネルを抜けると、その先は道路だ。通行人の絶えて久しいその道路は、ところどころひび割れ、雑草が顔をのぞかせている。道路はトンネルを出て五十メートルほどは橋になってお

り、下には村を東西に貫く川が流れている。県下一の清流と謳われる川の一部であるが、ここ最近の少雨ですっかり細くなつてしまっている。かつてこの川は迷信深い祖母の語り草であった。この川には河童が住んでいて、不用意に入ってくる人間を水に引きずり込むという。引き込まれた人間は内臓を食われ、そのまま川に流される。祖母の敬虔な信者であった私は、自分が河童に引きずり込まれて水中に臓物をぶちまける様を想像して大いに恐怖し、決して一人で川を訪れなかった。かつてあれほど恐れた川はいまや干上がろうとしている。私は首にかけたポラロイドカメラを川に向けて構え、シャッターを切る。夕暮れの空気を裂くように閃光が走り、やがてカメラが写真を吐き出した。それを一瞥してからファイルに挟み、バックパックに放り込む。そのまま橋を渡り、前方に続く道路を歩きだす。目的地は旧志賀戸小学校。私の母校である。

道中の風景は、はつきり言つてなんの面白味もなかった。川と山。それだけだ。虫の羽音も、鳥の声も聞こえない。聞こえるのはときどき細い風が木々や雑草を揺らす音と、私がコンクリートを踏みしめる足音だけ。額にじつとりと汗がにじむ。六時半ばでこの暑さだ。日はすでに暮れかけているが、コンクリートから立ち上るような熱気は依然衰えない。Tシャツにジーンズという軽装で来たのは正解だったようだ。手の甲で軽く汗

を拭つて、私は歩き続ける。時折立ち止まつて、川沿いの朽ち果てたプレハブ小屋や、雑草に隠されたガードレールの写真を撮り、バックパックにねじ込む。この調子で行けば、着く頃には日は暮れているだろう。

旧志賀戸小学校は村の入り口付近に位置している。二階建ての校舎はちょうどホームベースを縦に伸ばしたような五角形になっている。矢じりのように尖った先端が西側、反対の東側に生徒玄関に続くエントランスがある。汗を拭いながら到着した私は、ふたたび懐中電灯を取り出した。ここに来るまでにすっかり日は暮れ、ちょうど校舎の二階部分の影に位置するエントランスでは周囲の様子が分からないのだ。廃校になつてから数十年経った校舎のエントランスは、赤茶色のタイルがひび割れ、ところどころ黒ずんでいる。玄関の戸は施錠されているだろうと思つたが、どうやらそうではないらしい。そもそも、戸そのものの劣化が激しいのだ。戸にはめ込まれたガラスは白く曇り、腐った木製の取っ手は片方だけがかろうじて残っていた。私はそれに慎重に手をかけて引いた。軋むような音を立てながらガラス戸が滑り、どうにか人が一人通り抜けられるほどの隙間を作つて止まった。建付けが悪いのか錆びているのか、戸はそれ以上動かない。私はバックパックを背中から降ろし、先に戸の向こう側に押し込んだ。続いて横歩きで戸の隙間に体を滑

り込ませ、校舎内に足を踏み入れた。

校舎内には日中の熱気がこもっており、さらに黴の臭いが鼻をついた。昇降口に並べられた四つの下駄箱はどれも腐り、今にも倒れそうに傾いている。そこら中が埃に覆われているところを見ると、来訪者は少なくとも数年はいなかったらしい。私は下駄箱を倒さないようフローリングに足を踏み入れた。ここから廊下が三方向に分岐している。左へ進めば放送室と事務室、真つすぐ進めば職員室と校長室、そして保健室、右へ進めば二階へ続く東階段にたどり着く。私の足は自然と右へ向かっていった。すっかりワックスの剥げた埃まみれの廊下を、階段に向けて歩いて行く。五段程度の階段を上り、小さな踊り場に出る。さらにそこから右に曲がり、今度は十五段程度の階段を上る。また小さな踊り場があつて、さらに右に曲がつて十段ほど上れば二階に到着する。上った先は全校集会などに使われていたホールだ。三メートル四方程度の小さなホールの南東側に図書室があり、現在地の左に位置する東廊下を進むと理科室や音楽室に繋がる。私は左に曲がり、廊下を歩き始めた。幸い廊下の左手には窓があるため、弱弱しくも月明かりが視界を照らしてくれる。右手にある理科室は、備え付けの棚と実験机以外何も残されていなかった。理科準備室も同様に、埃を被った棚やラック類が鎮座するばかりで理科らしいものは何もない。まあ薬品

や人体模型なんかを残しておくはずもないが。とりあえず数枚写真を撮つて理科室を後にする。鼠や虫の死骸の一つでもあるかと思つたが、あるのは埃ばかりで面白くない。音楽室はどうであらうかと戸に手をかけると、こちらは抵抗もなくすんなりと開いた。理科室に次いで面積の広い教室であるが、ピアノや机がすべて撤去されているとそれが際立つ。理科室のような机もないから、完全にがらんどうだ。周囲を懐中電灯で照らしてみるが、やはりここも埃と剥がれたワックス以外には何もない。さつきから同じような風景ばかりで早くもうんざりしてきている。こちらも適当に写真を撮り、次は図書室に向かうべく踵を返した。

図書室は位置的には更衣室の裏側にあたる。そこかしこに設置されていた大型の本棚で手狭な印象を持っていたが、読書テーブルと小型の本棚が撤去されているとやはり少々広く感じられる。壁に埋め込む形で設置された本棚のみが残されているが、当然本は一冊もなく、埃に覆われている。入口の対角線上には一段高い畳のスペースがあるが、この畳も埃を被り、陽に晒されてすっかり変色していた。また数枚の写真を撮り、次は各学年の教室を目指す。この学校はそもそも小規模であつたため、教室は各学年につき一つしかない。図書館側から西に向かつて六年生、五年生と降順に並んでいる。教室構造はすべて同



じであるため一つ一つ見ていくのは時間が惜しい。廊下から懐中電灯で照らし、一教室ずつ写真を撮るに留めた。木製の戸が腐って崩れかけているのも理由である。右手の廊下に並んだ手洗い場は、ステンレスが白く曇り、足元の白いタイルは黴で黒いしみができていた。こんなところに来ておいて今更潔癖などと言うつもりはないが、やはり不快なので近づくのは御免だ。こちらでも写真を撮るに留め、一年生の教室を目指して足を進める。

一年生の教室もおおむね他学年の教室と同じだ。埃と黴の臭い、それ以外にこれと言って目新しいものはない。次はトイレを目指すかと振り返りかけて、私はふと気づいた。私は無意識に、かつてこの学校で行われた肝試しのルートを辿っているのだ。小学校五年生の夏休み、六年生と五年生だけが校内に泊まり込む行事があった。肝試しはその日の目玉イベントだったのだ。二人の友人とグループを組んで、今辿ったのと同じ道を歩いた。脅かし方は文字通りどれも子供だましかった。教室に隠れた教員が窓を叩いたり、物陰から飛び出してきたり、創意工夫などあったものではない。実に下らない、馬鹿げた行事であった。驚き、惑い、泣き叫んだかつての私は、なんと滑稽であったことか。思いがけず記憶が蘇り、私は自嘲気味な笑いをこぼした。それならば今日とはほとんど同じルートを辿ってやろう

と、なぜか意地のようにそう思った。私は踵を返し、今度は西階段に向かう。

西階段は十五段ほど下って踊り場、さらに十数段ほど下ると一階に着くようになっていく。左に進めば一階トイレが並ぶが、肝試しのルートではこのまま前方の保健室へ向かうことになる。あの日、肝試しのゴール地点であった保健室にたどり着いたとき、私がどんなに安堵したことか。やはり幽霊などいなかったのだと、怯えきった自分を笑いたいほどだった。しかし今の私は、幽霊の一人でも出てきてほしいと望んでいる。ここに私以外の来訪者が、もしくは住人が一人としていないからだ。蜘蛛や鼠の一匹もない。むろん人などいるはずもない。せめて幽霊の一人でもいれば、この場所があらゆる存在に見捨てられた場所ではないのだと、そう思える気がしていた。人に捨てられ、生き物に捨てられ、来訪者の絶えたこの村を嘲笑ってやろうと意気込んでやってきたのに、この矛盾した感情は何だろ。この地を愛しているわけではない。戻りたいわけでもない。なのに、なのに孤独を煮詰めたようなこの村が、陰鬱な空気が澱のように溜まったこの村が朽ちていく様が、なんとも苦しく許しがたいのだ。心臓が岩のように固くなり、胸を圧迫されるような感覚を覚えながら、私は保健室の戸を引いた。

保健室は正方形に作られているが、実際に使われていたのは左手に備え付けられた押入れを除いたL字の部分だけだ。保健室も他の教室と同じ有様であろうと予想していたが、意外にもこの教室が最も荒廃した場所であった。原因はおそらく、保健室の南側、外に面した出入口のガラスが大きく割れていることだろう。そこから雨風が入り込んだらしく、フローリングは腐ってぶよぶよと撓んでいる。それは私のほかにも来訪者がいたことを示しているのだが、この荒れ具合から察するに随分昔のことらしい。少なくとも一年前や二年前のことではないだろう。この部屋以外の窓が無事であることや、廃墟に付き物の落書きが見当たらなかったことを考えれば、その来訪者は校舎内を散策するほどの勇氣はなかったようだ。中の様子はそのような不埒者が立ち入ったにしては綺麗すぎる。私は懷中電灯で保健室の中を照らす。外向きの出入口付近の床が劣化していること以外は、他の教室と大差ない。埃と黴、得体の知れない黒い染みばかりだ。慎重に足を踏み入れ、L字に折れ曲がった先を覗いてみる。かつては休憩用のベッドが置かれていたが、勿論今は撤去されている。保健室らしいものの名残と言えば、天井に残ったカーテンレールくらいだろう。壁際に屈んで押入れの戸を引き開けてみると、長らく封印されていた黴の臭気が、漸く逃げ場を得たとばかりに流れ出てきた。思わず軽く咳き込みながら中を照らす、木製の押入れの中にも黴と埃以外は見受け

られない。生き物の死骸はおろか、蜘蛛の巣ひとつ見つからないのがかえって不気味だ。私は立ち上がり、周囲の写真を何枚か撮る。ふと腕時計を確認してみると、ここに来てから三時間は経過している。それほどゆつたりと歩いてきたようには思えなかったが、気づかぬうちに随分熱中していたらしい。帰りは行きと同様、市街地でタクシーを拾うつもりだったが、これ以上ここに留まれば家に帰り着く頃には朝方になってしまう。逡巡の後、私は校舎を後にすることに決めた。電波も通じず、人もいない場所に長居するのは危険だ。私は保健室の入り口の右手にある職員用玄関から外に出た。最後に振り返って校舎を見上げる。月明かりに照らされた校舎は、泣いているように見えた。校舎が醸し出す空気のせいだけではない。クリーム色の壁には、雨に流された苔や黴のせいだけでなく、黒い筋が這っている。さながら黒い涙のように。その様子が反して、校舎がいやに無感情に見えるのがうすら寒く感じられる。寂しさも悲しさもない。ただ無表情にそこに在るだけだ。その様子がこの村の本質を示しているようだった。

この村はいつも余所者を拒んでいた。田舎によくあるそれとは似て非なるものだ。この村の住民たちは、決して余所者に自分たちの土地を踏み荒らされることに怒っていたのではない。そのような純粋な郷土愛など彼らは持ち合わせていなかった。

むしろ、怯えていた。彼らにはこの村しかなかった。この村で生まれ、この村で育ち、この村に骨を埋めることが決まっていた彼らは、ここに異分子が入り込むことが恐ろしくて仕方なかった。村を守りたかったのではない。村に守られていたかったのだ。彼らの唯一の結節点がこの村だった。だから彼らは余所者を徹底的に拒絶した。拒み、攻撃し、追い出した。私がこの村を激しく嫌悪していたのは、この排他的な性格が主たる所以だ。彼らは心のどこかで分かっていたのではないだろうか。この村を出れば、自分は生きていくことができないと。この村は、

さながら臆病な住民たちのための巨大な棺だった。だからこの村は志賀戸村などという名前なのだ。この村の性格を体現したような人間であった祖母によれば、志賀戸村はかつて屍戸村と書いたらしい。文字通りこの村は死の入り口だった。そして、出口はない。少なくとも、この地に沈んだ者たちには出口は見えていなかった。ここは、この村から出られなかった愚かな者たちの屍の積み重なる場所だった。次に屍となるものがこの地に子を産み、その子もこの地に縛り付けられ、この地で屍となった。幸運にもこの村の異常さに気づいて呪縛を逃れた者はここを去り、去る術を持たない愚鈍な者、そして去ることを恐れた臆病者たちが残された。屍の山が積み、それが次なる屍を引き寄せた。やがてその山が崩れ、そして村は滅んだ。その愚か者たちの積み上がった様が目に見えたなら、さぞ壮観で滑稽

だったことだろう。トンネルへ向かう道すがら、私は声を上げて笑った。笑っているのに、不思議と少しも愉快ではなかった。息を潜めたような静かな空気を震わせる己の声が、鼓膜に醜く響いていた。

翌日、私は自宅で昨夜の写真を眺めていた。あの村を夜に、しかもカメラなんかを持参して訪れたのは、目に見えない何かを見てやろうとしたからである。幽霊でも未確認生物でもなんでもよかった。前述したように私は、この村に未だ何かがいることを密かに期待していたのだ。だが、そのようなものは一つも見受けられなかった。人影も、幽霊も、不気味な生き物も、何一つとしてあの村にはいなかった。あの村は、やはり空虚な棺であった。入る者の絶えたその棺は、ぽかんと口を開けて次なる屍を待っているだけだった。虚ろな目をして闇雲に余所者を薙ぎ払ってきた屍たちは既に絶え、新たな屍はもう現れないというのに。そのとき。ふと私は、自分が抱えていた矛盾の理由が、あの村へのどうしようもない怒りであったことに思い至った。そうだ。これは怒りだ。あれほど私を苛んだ忌々しい村が、いとも簡単に廃れ、滅び、がらんどうの入れ物としてそこに在ることが憎くて堪らなかったのだ。私をこれほどまでに苦しめておきながら、勝手に滅びるなどふざけるなど、馬鹿にするのも大概にしろと、そういう怒りが燦っていた。だから私は、

まだ村には何かがあると、滅亡を止める何かがあると、そう信じようとしていたのだ。ざまあみろ、滅んでしまえと言いながら、私はまだあの村が生きていると思ひ込もうとしていた。そう気づいた途端に、私はまた笑いだしていた。畢竟、同じ穴の貉ではないか。やはり私も、あの村の愚かな屍たちの仲間だったのだ。村に縛られ、村に縋り付き、村が消えることを恐れた。なんと皮肉なことだろう。朽ちゆく故郷を笑ってやろうと勇んで故郷へ帰ったくせに、本当に笑うべきは愚鈍で間拔けな己であつた。妙に清々しい気分では写真の束を手に取り、懷から取り出したライターで火をつける。荒んだ村の風景は黒く爛れて縮み、徐々に塵と化していく。棺は、屍は、燃やしてやらねばなるまい。これは供養だ。あの村の、あの村の屍たちの、そして最後の屍である、私自身の。



「ええ、経理担当の篠原と言います。この度は、ね、私共の会社を選んでいただいて、ええ、ありがとうございます。これからはこのサービス業界を引っ張って行く同志として、志高く共に励んでいきましょう」

入社式から数日。新入社員数名を交えた宴会の席で、既に顔の赤い男共が喉を枯らしながら挨拶を回していた。どれもこれも下らない、形式ばかりの焦れた挨拶。聞いているだけで胸やけを起こしそうなそれらの演説を、新人君たちは酒と一緒にくた必死に浴びていた。

面接気分が未だに残っているのか、それとも彼らが特別健気なのか。今はパワハラだなんだで大々的に表明できないでいる宴会に、自ら志望し参加した有望株達。どうやら彼らは私とは違い、お上連中と波長が合うらしく、等しく顔を赤くしながらやんややんやと騒いでいた。きつと数年後には彼らが下の世代に絡みにいく立場となるのだろう。生真面目で主体的でノリがいい。そんな片鱗ばかりが目について、私は思わず顔を歪める。

「どうだい、黒田君。今年の若い子たちは活がいいじゃない

の

「そうですね。喜ばしいことで」

「あつはつはつはつは。去年は君一人でどうも寂しかったからね。こっちもワクワクしてきちゃったよ」

言いながら、坂田は私の首に腕を回してきた。酒のキツイ匂いと、生暖かい加齢臭が鼻をつく。私は酒に口を付ける振りしてそっぽを向くが、坂田はしつこく顔を近づけてきた。

「ところで、黒田君。今年度のハシ役だけど、君に頼めないかな」

「……は？」

耳元で囁かれた言葉に、私は思わず声をあげる。

「いやー、本当はね、三元君が担当する予定だったんだけどね、彼、もうすぐ子供が生まれるって言うじゃない。そうだったら家事とか子育てとか色々大変だし、ハシ役を任せるのはこっちも気が重くてね」

だからって、どうして私なんだ。

「私以外にも、適役はいるでしょう。それこそ、新西さんとか」

「いやー、新西君はちよつと。やっぱり住まいが会社から遠いと、アシの問題があるからさ。その点、家が近くて、免許も持っている黒田君が適任なんだよね」

そんなことは私の知ったことではない。大体、住まいが遠からうがなんだろうが、新西の方が会社とのつながりが深いのだ。

奴に頼んだ方が後腐れないはずだろう。

「……っ」

そこまで考えて、私は嫌な想像をしてしまう。まさかあの禿げ出っ歯、自分から坂田に断りを入れたんじゃないだろうか。坂田だって私よりも先に新西にハシ役を要求するはずで、私の事なんか候補にも挙がっていなかったはずだ。だが、お気に入りの新西がどうしても嫌だと突っぱねるものだから、渋々私の方に。

こんなものは推測に過ぎない言いがかりだが、一度頭に浮かんでしまうと、決して拭い去ることが出来ない類の楔だった。

「いやー、僕も引け目は感じてるんだよ。でも、今度なにか奢るからさ。ここは僕の顔を立てると思って、お願いできないかな。ね、ホント、何でも奢るよ。黒田君が知らないような美味しい酒だって、たくさん知ってるんだから」

私はもはや隠そうともせず舌打ちを響かせる。こんな馬鹿げた話があるか。どうしてお願いする立場である坂田の方が、人生の先輩面してご高説宣っているのだ

そして何より馬鹿げているのは、おそらくハシ役は既に私で決定していて、覆せないということだ。坂田を始め、私の上司に当たる人間は全て、私をハシ役で考えている。今ここで断りを入れた所で、次は篠原や、またその上の安治あたりが来るだけだ。

結局のところ、私に残された選択肢はただの二つだけだった。一つは坂田の顔に泥を塗り、すったもんだの果てにハシ役を任せられる。もう一つは、坂田のご機嫌取りも兼ねて今ここでハシ役を承諾してしまう。そう、あまりに簡単な選択だった。

「……分かりました」

「ホント！ いやー、助かるよ。それじゃあ、うん、アゴ役は黒田君に決定と言うことで。いやー、ほんと、黒田君にはいいお酒飲んでもらわないとねー！」

そう言うのと、坂田は私のジョッキに酒を注ぎ始めた。

「でも、これもね、僕の人徳なのかな。黒田君のお世話はちゃんとやった自覚あるからね。この間だって家の前まで迎えに行つてご飯連れて行つてあげたし、まだまだ会社に馴染めない黒田君のために、集まりにも誘つてあげたしね」

「ははっ。坂田さんが遅刻したこともありましたね」

「あれは、本当に悪かったよねー。あんな暑い中呼び出して置いて、遅刻しちゃうんだもん。それで、僕、どうしたんだっけ……ああ、そうそう！ 黒田君が何度も連絡してくれてたのに気づかないで、一人で取引先の応接室で涼んでたんだ！」

坂田は豪快に笑うと、コップとジョッキを重ね合わせる。

「ま、今回は頼もしい後輩も出来たことだし、黒田君も良い先輩として、手本見せてやつて」

悪びれる様子もなく、黄金色の液体を喉に流し込む。どうや



らこの男には一言謝るといふ発想が頭にないらしい。

別に、酒なんか奢ってくれなくても良いのだ。こいつの下らない趣味で選んだ酒に、いい後味が残るわけがない。また大した腕でもないのにやたらマウントを取りたがる性格もこの際良しとしよう。私だって人にとやかく言えたような性格じゃない。

それでも、たった一言。たった一言「すまなかった」という言葉ぐらいは頭に浮かんでくれてもいいんじゃないか。こいつらは、揃いも揃ってただの一言でさえ、私に謝ったことはない。

ふと、視界の端に新人君達の姿が映った。「飲みの席は無礼講」と宣って、上司連中と楽しそうに騒いでいる。——きつと、このあたりが潮時だった。





## ニューデイズ

宵蘭

学童が並べた筆の火を見てる私のどこかが燃やされている

たいせつに溶かしたはずの飴玉に斬られてはまた果汁を真似る

土砂降りに任せたいものごさいません知らぬ存ぜぬ研ぐ無洗米

上向きの睫毛と蝶々盗み見る君の遺伝子たぶん筆記体

優しさも切り分けてくれ一口が分からぬくらいに臆病だから

こぼれ落つ寝室育ちの言葉にはミントをひとつ添えて飲み込む

雨上がり片方濡れたあの人を七本足の蜘蛛が抱き込み

美しくうつくしくいよういつまでもヒールに硝子を貼り付けながら

## 食い意地

海葵

彼女の驚く顔が見たくて  
最近読んだらしい小説に出てくる  
ツナとトマトの豆乳煮麺をつくった  
丸くした目が愛おしいと感じながら  
僕は煮麺に黒胡椒を振ると美味いか  
気になっていた

彼女のリクエストで  
久しぶりに開いた焼き鳥パーティーで  
ぼんじりをリスみたいに齧る口が  
いじらしくて健気だと思いつながら  
僕は砂肝をひとくち食べて  
もう少し焼いたほうが美味いかと  
考えていた

僕が食べたくて  
しこたま作ったメンチカツを隣で  
小さく箸で切り分ける彼女は

たぶん背筋が伸びてて綺麗で  
小さい口は変わらず愛らしかった  
だろうと思うのだけれど  
夢中でメンチカツに齧り付いていた僕はただ  
どのソースをかけると一番美味いかと  
悩んでいた

付き合ってから初めて一緒に食べたのは  
パエリアだったのを覚えている  
緊張と高揚感で  
全く味がしなかったことも覚えている  
日を重ねて  
皿を重ねて  
咄嗟に目の前の食べ物に気が向いてしまうほど  
あなたは生活の一部になったんだよ、と  
自分の食い意地に言い訳をしておく

## 掃除時間

午睡乃 ユメ

ナン枚もの雑巾が漬けられたあとの  
真つ黒なバケツを  
うつかりひっくり返してしまつて  
おっきな水の音がビッシヤアンと  
バケツの固い音がやな感じのカランカラ  
部屋中の子たちが失敗の音に振り向こうとした  
私の失敗からたつたの  
ゼロコンマナン秒あとに  
廊下側真ん中の窓ガラスが  
ピッシヤアアアン！  
首が忙しい子たち  
ヒトリの男の子がぶつかつて  
小さな生き物より慎重に扱つてた  
みんなの薄い窓ガラスがバラバラになつてしまった  
みんなが駆け寄る  
血が出てるかもしれないから  
私も見たいし行きたいけど  
私にはやることが残っていた

真つ黒な水がみんなの白いロッカーにまで  
飛び散っている  
乾いた雑巾はイチ枚しかないぞ  
教室のティッシュはみんなのものだから  
無駄遣いはダメだから、  
お母さんが持たせてくれたハンカチも  
数日ぶりに使うことにした  
なかなか水を吸わない二枚の  
どっちが強いかに比べてみて楽しい  
集まつた子たちに囲まれた男の子は見えないけど  
みんな大騒ぎしているのできつと怪我してる  
ぎゅうつと絞つてバケツに入れて  
もうイツ回布を水に浸す  
静かにしなさいという大きい声  
絞つてビチャビチャビチョオでかき消す  
あとスウ分位じゃ水は拭ききれないな  
小走りの誰かにバケツをけつられたけど  
倒れなかつたのでホッとした  
ツギの日白いロッカーは黒い汚れが目立った  
窓ガラスにぶつかつた子はいなかった  
窓ガラスがあつたところには

ガムテープで段ボールと新聞が飾られていた  
干していた雑巾とハンカチはまだ湿っていて  
下には黒い水溜まり



## 都会の歌

午睡乃 ユメ

マックテイクアウトして  
さつき借りたDVD覗いてる  
カーテン閉め切って暗い部屋  
どうやって見るのか分かんない  
プレーヤーが使えないけど  
別のアニメが見られる番組表  
八本くらい連続で見られる  
音量も8くらいに下げて  
チップスターは邪魔すぎる  
コマーシャルが十五分くらいだから  
しかも毎回同じだから  
ソファ逆さまに足引っかける  
ピアノの演奏が始まると  
気になっちゃうのがテレビ局の建物  
少し前に遊びに行ったときは  
白いロボットみたいだった  
(別のコマーシャルに出てたような)  
テレビで見たら黒くて大人っぽい

宇宙の秘密基地に見える  
いつかあそこに住めるのかなあ  
エレベーターに数回乗って  
ふらふらしながら歩くようじゃ  
だめなのかなあ  
逆さまにもつかれたし  
アニメ始まったらソファっぽく座って  
だいたいいつの間寝てる  
起きたら眩しい夜になってて  
なんでDVD見とらんのんって言われる  
眠かったけ明日見るんよって言う  
明日は平日だから忙しい  
一人で見るときは上手く暗い夜に  
するつもり

出会った意味がなくなるまで

犧 まい

こんがらがった頭の中をほどいてみる

あなたのことを考えると長い夜から長い夜へと変わった。瞳のなかに愛がないか指で舌でペニスで嗅ぎまわった。いや、ほんとペニスがあればいいんだけど。大丈夫です、怖がらないでください。取って食べたりしませんから。あでも食べたいくらい。面と向かって話す機会なんてないですから気に入ってしまつて顔を下に向けています。あ、ペディキュアかわいい、いやなにも言っていないですよ。どうかその笑顔は私に見せないでほしい。笑顔は友達と談笑しているときに遠くから眺めておくのが一番だ。付き合いたいって思ったことなかったけどタイミングを選ばずに可愛いって言えるって素敵だ。つい目で追つてしまふんです。目が合ったときの静電気がバチつてなった火が心地いいのです。あなたの好きなもの知りません、知りたくもありません。あなたのことをあなた以外のものから思い出してしまふと、あなたのことを想う回数も時間も膨れ上がって生活が成り立たなくなってしまう。風船を付けられたようにそれまで浮かんではまう。





## マザコンララバイ

犠 まい

俺、頑張ってるのに

頑張ってるねって褒めて欲しかった

生きることなんてどうでもよくて

ただお母さんに褒めて欲しかった

リストカットしてることはほんとに気づいて欲しかった

シャツについた血に気づいて欲しかった

ゴミ箱のティッシュの赤錆に気づいて欲しかった

大学の学問的な勉強じゃなくても

勉強しないといけないなんてそんなこと分かった

ただ休むときはそんなことわざわざ言わないで欲しかった、分

かってる

離婚したこと、転校したこと、遊びに行くのにあなたに頼まな

いといけないこと、何かを買うのに頼まないといけないこと、

文句言わないよあなたが頑張ってたのを知っていたから

彼女なんていらなかった

ただあなたに褒めて欲しかった

現実なんてあなたから褒めてもらう道具でしかなかった

ゲームにたくさん褒めて慰めてもらった

頑張ってるのに

文字が読めなくなった、机に迎えなくなった、夜眠れない、朝起きれない、体を起こせない

頑張ってるのに頑張れない

でも、頑張ってたから褒めて欲しかった

首のあざに気づかれたのにごまかしちゃった、首を絞めたこと

言いたかった、言えなかった、死にたいって言いたかった

なにか歪んでいることに気づいていた

母に言い訳するために誰かに無理やり精神科に連れて行って

欲しかった

過呼吸を起こし、リストカットをし、宿題をせず、テストの問題

題が解けず、死にたいって言って、助けてって言うていつもす

んでのところで大丈夫って逃しちゃう

やりたいことなんてなかった

ただ褒めて欲しかった

お母さんのしてほしいことはなんだろう

ただ褒めて欲しかった

転校してから人生おかしくなった？ 白馬の王子様が母親を

打ち倒して別の人生が始まる？

死にたくないから生きてるの

死んでほしくないと言われたから生きてるの

違うコーヒー豆を買ってその違いを楽しむのは好きかも

散歩とかお酒とか小さな違いを感じるのは好きかも

人って一人一人違うんだ、他の動物の区別なんてよく分からないのに

人の違いって大きく感じ取れるんだ、オモシロ

なんて夢見てる間に

起床、しっこ、二度寝、寝坊、欠席、落単、留年

トホホ

放課後

わめん

LEDの信号機ってよく見ると気持ち悪いよね

って前を走る改造ママチャリの

後ろにもついたカゴに向かって話しかけた

彼はカタカタと返事して

そうだねと言って僕は彼を追い越した

あいつが乗せてたチェーンのパスワードなんだと思う

僕は自分の自転車の前カゴに話しかけた

0404

それなんの数字

あいつの誕生日

それは僕の誕生日だよ

って僕は返事をしなかった

ヨガの広告からおにぎりの看板が生えてるよ

そういや朝からなんにも食べてなかったな

君はなにを乗せているの

夢と希望

違うよ僕のパソコンとお薬手帳だよ

財布も入ってるんだから落とさないでよね

角ハイボールの缶が落ちてるよ

お供え物だな

酔っ払いへのお供え物なんて聞いたことないよ

何で酔っ払いは弔わないんだよ

可哀想じゃないからだよ

僕はどこに向かってるの

明るい未来

違うよ皮膚科だよ

指にできたカタマリを冷やしてとりに行くんだよ

夏バテかな

まだ六月だぞ

もう七月だよ

最近は気温も優柔不断なんだな

パチンコって外装だけは凄く綺麗だよ

って僕は君に話しかけた

君はカタカタと返事して

そうだねと言って僕は君を乗り捨てた

わさび再び

わろん

わさびが余った  
またこの季節が来た  
開けるつもりなんてない  
ポッケに入れて  
一年ぶりに一緒に歩いた  
君は変わらないね  
僕はちよつとだけ大人になったよ  
久しぶりの口づけは前よりいくらか割増の刺激

生きてばかり

霧雨 蒼

鞦韆に乗ったあの夜は見えていた シンデレラにね、なれそうだった

切れやすい方が楽だし手軽だしウーリーあたりで結んでおいて

さようなら驟雨が打ちて透かしてく千客の花そつとひとひら

心中に腐葉土だけが降り積もり熱さ忘れず吞みて心中

桃の皮剥けば君との傷滲み黄色い線からお下がりください

つむぎ、つぐむ、つげぬ罪ばかり抱えいつまでつくろいつづけるのだろう

人の世は折り紙みたいなものですね あるべきでない折り目が映えて

介錯す（上手く切れない）もう一度（可食部少ないから嫌だなあ）

Good morning glory, 白玉も露もか細き夢のあとかたとなる

羽を筆られた白鳥であつても腹割れるまで歌えるだろう





あなたが大好き

明倉有斗

夏場のコンビニバイトなんてするもんじゃない。

時刻は夜の九時を回った辺り。店に来る客の人数は昼よりも格段に減った。たまに店の前を通り過ぎる人に反応して開く入り口の自動ドア。そこからたつぷりと湿気を吸い込んだ空気が入り込んでくる。もうすっかり日は落ちたというのに、外はどれだけ暑いのか。考えただけでも汗をかきそうだった。

特にすることもなく、俺はレジの所で突っ立っている。早くシフトが終わる時間にならないかな、とあくびが止まらない。眠い。

せめて椅子があれば座れるのに、と腰の辺りに疲労を感じながら、時計をチラチラと見る。さっきから全然時間が進んでいない気がする。全く、深夜のコンビニバイトなんてするもんじやない。特に夏場。仕事が終わったとしても、汗をかきながら家まで帰らないといけないんだから。

客いないし、地べたにでも座っててやろうかな、と思い始めた時、自動ドアが開く音がした。疲労した身にはイラつくぐらいに陽気な入店音に顔を上げると、女の子が一人店に入ってくる

るところだった。

ウエストの辺りまで長く垂らした黒い髪、くるぶしまで隠れた長袖の黒いワンピース、ヒールのある黒い靴。驚くほどに全身真っ黒だ。そんな格好で外の蒸し暑い空気の中を歩いてきたら、絶対に暑いだろう。

彼女は店内を見回す様子もなく、つかつかと俺が立っているレジの方へ歩いてくる。何だ？ ネットで買い物したやつを支払いか、もしかしてタバコでも買うのか？

俺の目の前まできた彼女は、迷いなくレジの前に出していたワゴンを指さした。

「これ五回お願いします」

彼女の指の先には、今日から始まった一番くじの景品がワゴンの上にずらりと並べられていた。ああ、そんなものがあつたことすら忘れていた、と俺はため息をつく。

それは最近若い女の子を中心に大人気らしい、ふわふわのクマのキャラクターのグッズが当たるくじで、何と一回につき八百円。高くないか？ このキャラにまったく興味もないし、知らない俺にとっては、こんな何の変哲もなさそうなベージュ色のクマごときに金を使う奴の気が知れない。

何がいいんだか、と思いながらレジを打つ。

「えーっと、何回でしたっけ」

「五回です」



五回。四千円？そんなに費やすのか。

代金を貰い、くじが入った箱を差し出しながら思わず乾いた笑いが出る。

彼女が引いたくじを五枚分開き、こちらに差し出してくる。全てF賞かG賞。あー、かわいそうに。四千円も使ったのに。そこから取ってください、と景品の乗ったワゴンを指そうとして、ぎよつとする。目の前の彼女が、俺の方を睨みつけていた。その目力の強さに、思わず息が止まる。何だ、いい景品が当たらなかったからって八つ当たりか。別に俺のせいじゃないだろ。

早く取ってください、と顎をしゃくって急かすと、彼女はクマの小さなキーホルダーと、クマがプリントされたクリアファイルをさつといくつかワゴンから取って、最後に俺をもう一睨みして店から出て行った。親の仇にでも向けるような目だった。何だってそんな……、と思わず顔をしかめてしまう。

彼女が出ていった代わりに、店の中にはまた温い外気が入って来ていた。冷房を強めにつけているはずなのに、首筋に少し汗が滲んだ感触がした。

……何だこれ。

次の日、食事を買いに近くのコンビニかスーパーにでも行こうかと、住んでいるマンションを出ようとした時。エントラン

スの床に、何かが落ちていることに気がついた。テニスボールくらいの大きさの何か。近づいて見ると、見覚えのある輪郭に、あ、と声が出る。

「……これ、あのクマじゃね？」

ほんとと床に落ちていたのは、あの一番くじになっていたふわふわのクマの小さなぬいぐるみだった。ベージュの毛並みは少しほつれているようだった。まるで、長い距離を歩いてきて、ここ débataんと行き倒れてしまっているような感じ。多分マンションの住人の誰かが落としてしまったのだろう。

そのままにしておけばいいか。貴重品でもないし、どっかに届ける必要もないだろう。それよりも自分の空腹を満たしたくて、俺はそのままぬいぐるみの横を歩き去り、マンションを出る。すぐ近くのスーパーに寄ってマンションに帰ってきた時には、持ち主が見つけたのか、クマはエントランスからいなくなっていた。

次の日の夜、適当なユーチューブの動画をスマホで見ながら、家でゴロゴロと寝っ転がっている。たまに脇に置いたペットボトルのコーラを飲みながらこうやって怠けるのは、休日の特権だ。もうすぐ日付が変わりそうだけれど、ブルーライトで冴えた目は、まだまだ閉じそうにない。

小腹が空いて、何かつまめそうなもの、ポテトチップスとか

無かったかな、とキッチンに向かうと、カタン、と何かが落ちるような音が聞こえた。玄関からだ。

物が倒れたかな、と思って玄関の方に行って確認してみるけれど、特に変わった様子はなかった。床に何かが落ちていたわけでもないし、倒れている物もない。気のせいかな、とまたキッチンに戻ろうとするけれど、ふと何かが目の端に引っかかった。はっと息を呑む。ドアポストの中に、何かが入っている。今日の夕方に確認した時は何も入ってなかったのに。

さっきの音はこれか？

……いや、でも。

振り返って部屋の中の時計を見る。夜中の十二時を過ぎている。こんな時間に郵便も宅配も来るわけがない。俺が見落として回収し損ねていただけか？

とりあえずドアポストを開けて、中に入っていたものを取り出す。それは小さめの白い小包だった。何かネットで注文していたっけ？

包装を破って、中身を確認する。出てきたのは真っ白な紙箱だ。だいぶ軽いけれど、何が入っているのか外からは確認できない。仕方なく箱に手をかける。

あれ？　そういえばちょっと待てよ。

箱を開きながら、かすかな違和感に気がつく。

外側の包装紙に、送り先や発送元、書いてなかったな。

……宅配便のラベルとかも貼ってなかった。

背筋を汗が伝うのと同時に、箱の中身が俺の目に飛び込んできく。

そこには、あの、クマの小さなキーホルダーが入っていた。

蒸し暑くて目が覚めた。肌にじつとりとしたものが張り付く感触があつて、気持ち悪い。俺、冷房切って寝たっけ。

ゆっくりと瞼を持ち上げると、やけに視界が暗い。あれ、朝じゃないのか。

枕元に置いてあるはずのスマホに手を伸ばそうとするけど、腕が動かない。いや、腕だけじゃない。全身が動かない。何かに全身をぐっと圧迫されて押さえつけられているみたいに。

状況を把握したくてもがく俺の頭上から、不意に声が降ってきた。

「起きたの」

ぎよつとして声がした方に視線を向けると、そこには人が立っていた。真っ黒くて長い髪、真っ黒いワンピース、ヒールがついた真っ黒い靴。すぐに誰だか分かる。数日前、俺が一番くじのレジを打ったあの女の子だ。

「何で、俺の部屋に」

気が動転して叫ぶと、彼女は表情の無い顔でこちらを見据える。

「あなたの部屋？……が？」

「え？」

何言っただい、俺は昨日確かに自分の部屋にいて。いや、そういえば、ドアポストに入っていた荷物を開けてから……。そのまま寝たっけ？ その後の記憶がない。

「自分の周りをよく確かめてみた方が良くないじゃない」

彼女の言葉に、さっきからほとんど動かない自分の身体やその周りを確認しようと、視線を落として、ひ、と思わず喉の奥から声が出た。

俺の周りを、小ささまざまな、あのクマのキャラクターのぬいぐるみを取り囲んでいた。さっきから肌に張り付いていたのは、クマのふわふわの毛だったのだ。そりゃこんな大量のクマに取り囲まれていたら暑いはずだ。可愛らしいであろうクマも、こんなに大量に集まったら不気味でしかない。彼らは、真ん丸なおめめで俺のことをじっと見つめていた。

ぎゅうぎゅうにクマに囲まれながら、何とか身体をねじって辺りを見回すと、そこは俺の住んでいるマンションの部屋ではなかった。俺の部屋より少し大きいくらいの空間、けれど壁には一つも窓が付いていない。彼女はドアを背にして立っており、そこが唯一の外界との出入り口のようなだった。明かりはほとんどついていないに等しく、部屋の中はぼんやりと薄暗い。色の識別がかるうじてできるくらいだ。

「お前、なんで。なんだこれ」

彼女は俺のことを睨みつけながら、床から一匹のクマを拾い上げる。彼女の身長半分くらいの大きさのクマは、彼女の腕にしっかりと抱きしめられた。

「わたし、この子が大好きなの」

そう言っ、彼女は自分の頬をふわふわの毛にくっつける。

そして、目を閉じる。

「やわらかくて、可愛くて、この子を見たら辛いことだって忘れられるし、いつだって幸せな気持ちになるのよ」

まあ……、一番くじあんなに大量に買ったんだから、好きなんだろうなってことくらいは分かる。でも、だから何なんだよ。何で俺がどこからも分からない場所に連れて来られて、こんなよく分からないクマに囲まれないといけないんだ。普通に拉致監禁、犯罪だろ。

俺が口を開こうとすると、彼女がゆっくりと顔を上げた。クマを抱きしめながら立っている様子は、プレゼントをもらった小さい子どものように見えただけで、その表情は冷たく、喜びのかけらも感じられない。長い髪が数房、クマに絡みついている。

「わたし、この子が大好きなの」

彼女は繰り返す。俺を睨みつけながら。

「だから、この子のことでバカにされるの、大嫌いなよね」

あまりの目力の強さに、反射的に後ずさりそうになる。

「バカにした奴のこと、許さないの。わたし」

「な、何のことだよ。そんなことしてない」

「あの日私がくじを頼んだ時、私のこと笑ったでしょ？五回もするのか、って。しかも、F賞とG賞しか出なかったら、可哀想だなあ、って感じで笑ったわよね？」

ぎくりとする。バレていたなんて。そんなにあからさまにしたつもりはなかった。

「いや、悪かった。バカにしたつもりはなくて、そんな四千円もくじに使うなんて理解できなかったただけなんだ。そう、不思議だなあって思っただけで」

「不思議だなあって思ったら人のこと笑っていいわけ？あの時のあなたの態度は、人の好きなものをあざ笑ってるようにしか見えなかった。F賞とG賞だったら可哀想なんて、酷い思い込み。あのキーホルダーとクリアファイルの愛らしさなんて、言葉にできないくらいなのに」

「……、だから何なんだよ。そんなことで俺のこと拉致したのか！お前、これ立派な犯罪なんだからな」

そう言い返しながら、クマを抱きしめ続ける彼女の細い腕に目が止まる。てか、そもそもよく一人で俺のこと誘拐できたよな。とても彼女にそんな力があるようには見えない。

そんなことを考えていると、彼女が俺の思考に応えるように、

首を傾ける。

「私があなをここまで連れてきたわけじゃないもの。あなたがどのマンションに住んでいるか、どの部屋にいるか、調べてここまで連れてきてくれたのはこの子たちよ」

「……は？」

この子たち、って。

ざわざわと、何かが近くで蠢き出す。何か、一つじゃない。ありえないくらいたくさんのが。

不意にもものすごい力で手首を掴まれて、声を上げる。見ると、ふわふわのベージュ色のお手てが俺の手首を握りしめていた。手首、だけじゃない。あらゆる方向から手が伸びてきて、俺の身体中を掴む。周りを取り囲んでいる大量のクマたちが、今では立ち上がって俺を引っ張っていた。

何だ、何だこれ、クマが動いている。

「おい、何するんだ、これは何だ！」

全身黒色の彼女に向けて叫ぶと、彼女の腕の中にすっぽりとおさまっていたクマが、次第にむくむくと大きくなっていく、彼女の身長を追い越したクマは、他のクマ同様に両足で立ち、彼女の細い肩をふわふわの腕で引き寄せた。彼女がクマの胸元に頬を寄せる。まるでその姿は恋人同士のように見える。片方がクマであることを除けば。

「バカにした奴のこと、わたし、許さないって言ったでしょ」

俺の身体を掴むクマたちの手に入る力が、どんどん強くなつ

いた。

ていく。節々が千切れてしまいそうなほどの痛みが身体に走って、たまらなくなつて叫ぶ。痛い。

視界の端で、彼女が満足そうな表情を浮かべるのが見えた。「引きちぎれるのが先？ 暑すぎて脱水になる方が先？ どっちでもいいけど、次の人生までちゃんと覚えておきなさいね。クマを笑うものはクマに泣くのよ、ほんとよ」

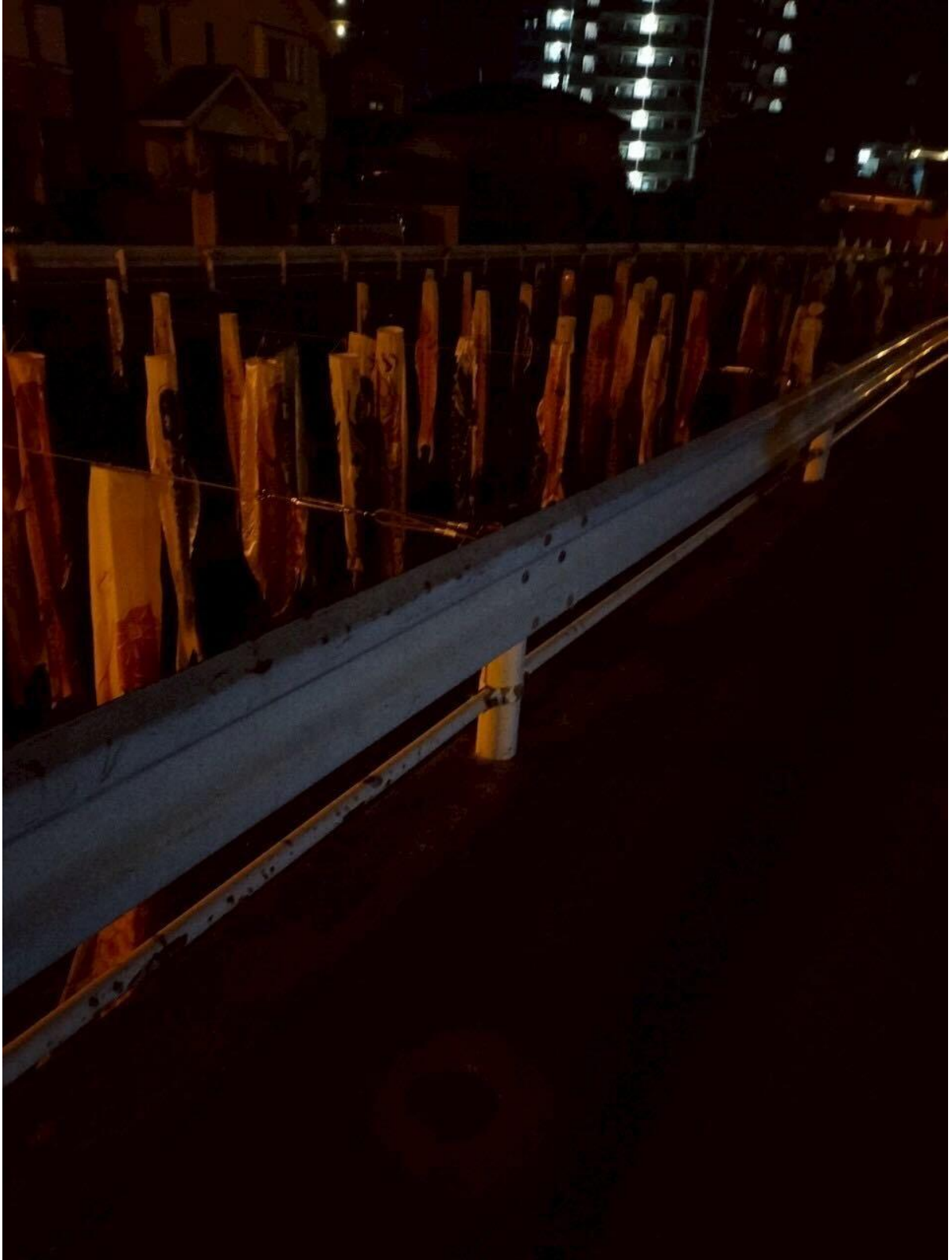
尋常じゃない量のふわふわに囲まれているせいで、俺の身体からはずっと大量の汗が流れ出している。頭はクラクラし始めるし、四方八方に引つ張られるせいで絶叫を続ける喉には、もう少しの水分さえも残っていない。ブチ、と何かが弾けるような音がして、身体はどこかに力と感覚が入らなくなる。何とかして視界に映した彼女は、幸せそうにクマと抱き合っていた。最早彼女の眼には俺なんて入っていない。

「これで、また私の嫌いなものが世界からひとつ消えるわ」

柔らかな手が、彼女の長い髪を撫でる。彼女は、心底幸せそうに笑った。甘やかな声で、彼女はささやく。

「だから、あなたたちが大好き」

だから、夏場のコンビニバイトなんてするもんじゃない。意識が薄れていくのを感じながら、俺はそんなことを考えて



夜中であるにも関わらず、彼等はエキゾースト音を奏でながら、互いに競い合った。いわゆる「走り屋」だ。彼等は速く走ることによって憑りつかれた連中だ。彼等の車とともに峠を駆けるとき、己の技術を試すべく、常に限界を攻めた。彼等のほとんどは口を揃えて言う。

「峠で速いやつが一番かっこいいんだ。」

代田理一は、目の前の青年に質問した。

「君はその台詞に感化されて、免許を取ったの？」

「はい！あ、いや、ちょっと違くて。あ、」

青年ははっとしたかと思うと、自身の免許証を代田に見せつけた。

「西井泰雄といいます！ 大学一年です！」

西井は常に腹から出した声を発し続けた。代田は突然の自己紹介に驚くとともに、慣れない大声に苦しみながら質問を続けた。

「で、その、なぜ僕に話しかけたんだい？」

その質問をしたところ、先ほどまでとは打って変わり、西井

は真剣な顔立ちになった。

「実は俺、」

代田は身構えた。

「師匠の弟子になりたいんです！」

代田の脳がフリーズした。自分が師匠と呼ばれることはない。なった覚えもない。何かの道場を開いたわけでもない。西井は自分が師匠といった男が啞然としていることに気づかず話し続ける。

「俺、以前友達に誘われてここに来たことがあって、そのときにはじめて、レースを見たんです。」

代田は意識を取り戻した。改まって西井の話に耳を傾ける。「そのレースが、えっと、ドリフト重視のなんちゃらってやつで。」

「多分、ドリフト重視型のタイムアタック制レースだね。それで？」

「俺、そのレースを間近で見て、ほんともう、すごくものすごかったんですよ！」

未だ西井の大声に慣れない代田は既に、目の前の青年の意図を概ね推察していた。

「そのレースで特にすごかったのが、黒色のRX-8っていう車なんです。カーブを曲がるときに、外側に車が向いて、事故ると思ったら、逆にグワーンと内側に入っていて、ガードレール

すれすれに走っていったんですよ！　それがかつこよすぎで！」

おそらくフェイントモーションのことだが、今までの話の内容から、代田は説明するのを止めた。

「友達から、そのRX・8のドライバーはここだと有名な人だつて聞いてたんです。実際に見てみて鳥肌立ちまくりでした！　その後、その友達に言われたんです。『峠で速いやつが一番かっこいいんだ。』って。そのとき、俺思ってたんです。車を走らせた、レースやりたいって。その車に乗ってた人に色々教わって。」

西井は代田に視線を向けた。代田は少し戸惑う。

「だから、急いで免許を取って、ここに来たんです！　そして、黒色のRX・8が来てるって聞いて、走りまわって師匠の後ろにある車を見つけました！」

事の顛末を聞いた代田は、深呼吸をした。彼の推察は当たっていた。

「なるほど、僕が昔参加したレースを観戦したことがきっかけで、レースを目指すようになり、免許取得後、偶然僕がここに来た日に君も来ていて、僕を見つけて話しかけたってことだね。」

「はい！　まとめるとそうなります！」

先ほど西井が唐突に話しかけてきたとき、代田は少々困惑していた。話が支離滅裂だったのである。とにかく自分の伝えた

いことをつ声高らかに間髪を入れず伝えられたため、最初代田は何も理解できていなかった。そこから、西井に落ち着いてもらい、順序だてて説明してもらって、今に至る。

「だから師匠、俺を弟子にしてください！　お願いします！」

「え、ええと、」

今度は深々とお辞儀をされ、代田は慌てた。

「僕は、まず師匠じゃないし、呼ばれたこともないんだけど、西井が頭を上げる。」

「いえ、俺の中では師匠です。そう呼ばせてください！」

「う、うん、そこまでいうなら。別にいいけど、」

代田は西井の圧に押され、師匠呼びを許可した。しかし、弟子をとることについては既に考えを固めていた。

「まずは、その、ありがとう。僕に憧れる子がいるとは思ってなかったから。」

「そんなことないですよ！　師匠の走りに憧れる人なんてめちゃくちゃいますよ！」

代田は、伝えようと決断を下した。

「でも、」

「はい！」

「うーんと、」

「はい！」

「その、」



「はい！」

「……」

沈黙せざるを得なかった。相槌に明るさの圧力がかかっていた。ここで、「NO」と伝えるのにはかなりの勇気がある。その勇気が今の代田にはなかった。

「さ、最初は、西井君の今の走りを見たいかなあ、と。」

「え！もしかして、入門試験みたいなことですか？」

ほとんど、口から出まかせだった。本当は弟子を取りたくないにも関わらず、今の発言で、逆に弟子を取るようなスタンスに変わってしまった。

師匠の突然の入門試験に驚く西井だったが、すぐに元の自信溢れる表情に戻り、代田から離れ始めた。

「勿論受けます！今から自分の車、取ってくるんで！」

そう言い残して、早々と走り去っていった。代田は西井の姿が消え去った後、ひどくため息をつき、苦笑した。

「断れなかった、どうしよう。」

困り果てる代田だったが、前言撤回は彼の性分に合わなかった。

結局、師匠は西井の試験を執り行うことになった。

しばらくして、代田のRX-8の隣に一台の白い車が停まった。NCロードスターだ。中古価格ではおおよそ百十万円で、安価

で入手できるスポーツカーの代表格の一つである。十年來のオープンカーらしい幌の破れが、いくつか見て取れた。

「これが君の車だね。」

「はい、八十万で購入しました。」

「グレードはどんな感じかな？」

「ぐ、ぐれーど？」

「あ、ごめん。」

先ほど分かったことだが、西井は現時点で、車に対する知識が欠片もない。知っているのは、車の名前と、価格だけだ。

「ちよつと、エンジン見てもいいかな？」

「ええ、勿論！」

流石にボンネットの開け方は知っていた。代田はエンジンルームの中央を調べた。おそらく、2Lのエンジンだ。NC系が他の型式に勝る点の一つである。

「中も見ていい？」

「ええ、喜んで！」

西井が執事のようにドアを開け、そして乗車を促した。代田はまず内装とシフトレバーを確認した。黒を基調としたシートに6速マニュアル。代田は確信した。

「間違いない、これはRSだ。」

「RS？」

「よりスポーティなモデルってことだよ。」

何も知らない割に、よくこんなに良い車を手でできたなど代田は心の中で感心した。もしかすると、西井をこの峠に誘った友達が助力したのかもしれない。

「よし、じゃあ早速走ってみようか。」

代田は彼なりに覚悟を決めると、かえって楽しくなってきた。「お、いよいよっすか！しゃあ！気合い入れるぞ！」

峠に彼の甲高い声が響いた。代田の気分が急降下する。代田には周囲の人間の視線が痛かったのだ。そこで、やつのことで勇気を振り絞った。

「あ、あの、」

「はい！なんすか！」

「もうちよつと、声を小さくしてもらってもいい？」

「え？ あああ！ すんません！」

「い、いや、謝る必要はないよ！」

元来こういった類の人間との対話をなるべく避けてきた代田にとって、この状況は過去類を見ないほど苦痛だった。

音量を下げてもらい、二人は車内に入った。西井は運転席に座ると、手慣れた動作で発進の準備を行った。代田はその様子に少し驚いた。

「手際がいいね。」

「え？ そうすか？ まあ、結構乗ってるんで慣れては来てるかもです。」

代田は小さな疑問を抱き、西井に質問した。

「西井君、免許取って何か月経った？」

「えつと、一か月です。」

「一か月？」

「はい！」

マニュアル車の初心者は一か月かけても操作に慣れないことが普通だ。通常だと二か月ほどで形になる。西井は物覚えが良い方なのかと代田は感じた。

「じゃあ、峠を走ってみよう。まずは普通の速さで。」

「了解です。それじゃあ、しゅっぱーっ！」

二人のいる峠の道は、私有地化された元公道であり、荒れた旧道がある程度整備されてレース場に様変わりしたのだ。現在は、整備した営利団体の下に運営されている。

「ここは昔から『走り屋の聖地』って呼ばれててね。整備される前にも、そういう人たちが無茶な走りをしてたんだ。」

「へえ、でもそれって、違法なんすよね。」

「勿論。公道での危険な暴走行為だからね。彼らの多くはその行動を何とか正当化したがるけど、真つ当な正論は一つも聞いたことがないよ。」

「けど今は、こうやってレース場になって、合法的にレースができるようになったんですね。」

代田は真つ直ぐ前方に視線を向けたまま、会話を続けた。

「数年前にね。レース場になるって決まったとき、走り屋たちは大いに喜んだんだけど、その後にレースするにはライセンスが必要ってことになってね。そこで反感を買ったんだよ。そのライセンスの入手が難しいらしくて。」

その言葉に、西井が首を傾げた。

「え、でも俺、免許取ってから一か月経ってないけど、ライセンス取れましたよ。」

「ああ、それは西井君に交通違反の前歴や人身事故歴がないからだよ。君の持つてるライセンスは、一番低い等級だよね。」

「はい、多分そうっす。」

西井は、自分がライセンスを取得する際、やけに重々しい雰囲気だったことを思い出した。

「彼らはしばしば警察に捕まったり、古びた道で競い合うものだから事故を起こしたりと色々やってたから、ライセンスの取得がとても難しかったんだよ。」

「なるほど。」

「でも、取得の条件自体は比較的易しめだから、色々条件を満たせば、そういう人でも取れるものではあったんだ。おっと、ここかなりのヘアピンだから気を付けてね。」

「了解！」

西井のNCは、峠道の間付近に位置するヘアピンカーブを

難なく走り抜けていった。かなり熟達していると、ここまでの西井の走りを見た代田は思った。初心者らしいミスや、不安定さはあるものの、免許取得後一か月でこの走りは見事なものだった。ここで、西井は推察した。彼は世間一般でいわれる、感覚派のドライバーなのではないかということだ。理論で突き詰めるタイプではないようだし、何より、車に対する情熱はあっても、知識はすっからかんだ。だとすれば、この一か月の間で西井は、車の走らせ方を知らず知らずのうちに身体に覚えさせたのかもしれない。

「それで、走り屋の人たちはその後どうしたんすか？」

西井は話の続きが気になったようだ。代田は先ほどの話の内容を思い出す。

「ええと、ああ、走り屋たちはその後、晴れて公式なドライバ―になったんだけど、やってることは以前とあまり変わらなかったんだ。それからしばらく経つと、他の公式ドライバーと色々揉め事を起こすようになって、団体から注意喚起が出されたんだよ。」

西井は明らかに不快な顔を表した。彼らの行動が気に入らなかったのだろう。

「それ以来、彼らは普通の公式ドライバーを排斥して、峠や首都高から来たストリート出身の人たちで固まって、派閥が生まれた。これが、走り屋だった人たちが今、ストリート系って呼

ばれる由縁なんだよ。」

「へえ、そうだったんすね！　じゃあこの峠って、そのストーリート系の人たちが多いってことすか？」

「その通り。さっきも言ったけど、元は『走り屋の聖地』だからね。気を付けた方がいいよ。彼らの多くは、かなり非常識な性格を持っているから。」

「わ、わかりました。」

これまでとは打って変わって、歯切れの悪い返事だった。代田はその理由をすぐに察し、微笑する。

「ごめん、僕もそのうちの一人かもね。」

「え、あ、いや違います、これは！」

「いいんだよ、そう思われても仕方ない。」

「……」

それまで快活に会話していた西井が初めて沈黙した。師匠に失礼な言動をしてしまったと悔やんでいる。代田はフォローを入れるように、話を続けた。

「嘘に聞こえるかもしれないけど、僕は別に走り屋じゃなくて、元々レーシングチームに所属してたんだ。」

「ええ！」

元気な西井が帰ってきた。

「レーシングチームって、サーキットとかで、めちやくちや速い車で戦う人たちのことすよね！！」

「う、うん、そうだね。」

「師匠は、そんなどこに所属してたんすか？　めちやくちやすごいじゃないですか！！」

「あ、ああ、うん、ありがとう」

乗車前の声量に戻ってきたと代田は思った。

その直後、車の後方から光が入り込んだ。後続車である。

「あ、西井君、後ろ。」

「おっと、あぶないあぶない。」

西井は、話に夢中だったため、慌てて運転に集中した。後続車は西井のNCより速い速度で迫ってきた。目前にはコーナーも迫ってきている。代田は西井に警告した。

「ここも、さっきのヘアピンほどじゃないけどきついから、後ろに気を付けて行こう。」

「わわかりました！」

その瞬間、後続車は一気に加速した。NCにかなり接近した直後、コーナーに進入した。衝突寸前だ。

「気を付けて！」

「うわっ！！」

突然の出来事に焦った西井は、ハンドル操作がおぼつかず、センターラインを少し越えそうになった。すかさず代田がハンドルを掴み、慎重にイン側に切る。NCはラインを越えることなく、コーナーを曲がった。コーナーの中央まで来たとき、後

続車はセンターラインを越え、アウト側からNCの隣に並んだ。代田は窓からその車を視認した。シルバーのクーペ。初代86だった。

86はそのまま加速し、NCを抜き去っていった。

「あつぶないなー。あれって明確なマナー違反ですよ。」

西井が代田の前で初めて怒りを露わにした。代田は彼の言葉に同意した。

「うん、本当に危ないよ。本当に。」

代田の目は、86を見ていた。

峠を走り終え、二人が出会った駐車場に戻ってきた。すると、

駐車したNCの右隣にすぐさまあの86が停まった。明らかに西井たちを意識している。

「何なんでしょう。」

「あー、普通に不味いかも……」

86から男が一人出てきた。髪を銀色に染めている。その姿は明確に不良だった。男はNCに近づいてきた。

「……」

西井は息を飲んだ。体の小さな震えから恐怖を覚えていることが分かる。その様子を見た代田は、咄嗟にドアを開けた。車から降り、男と対面する。

「あの、なんででしょうか？」

「あ？」

男は眉を顰め、代田を睨みつけた。代田は臆することなく、話しかけた。

「さっき、コーナーで追い越した人ですよ。ああいった運転は危ないので、やめていただきたいのですが。」

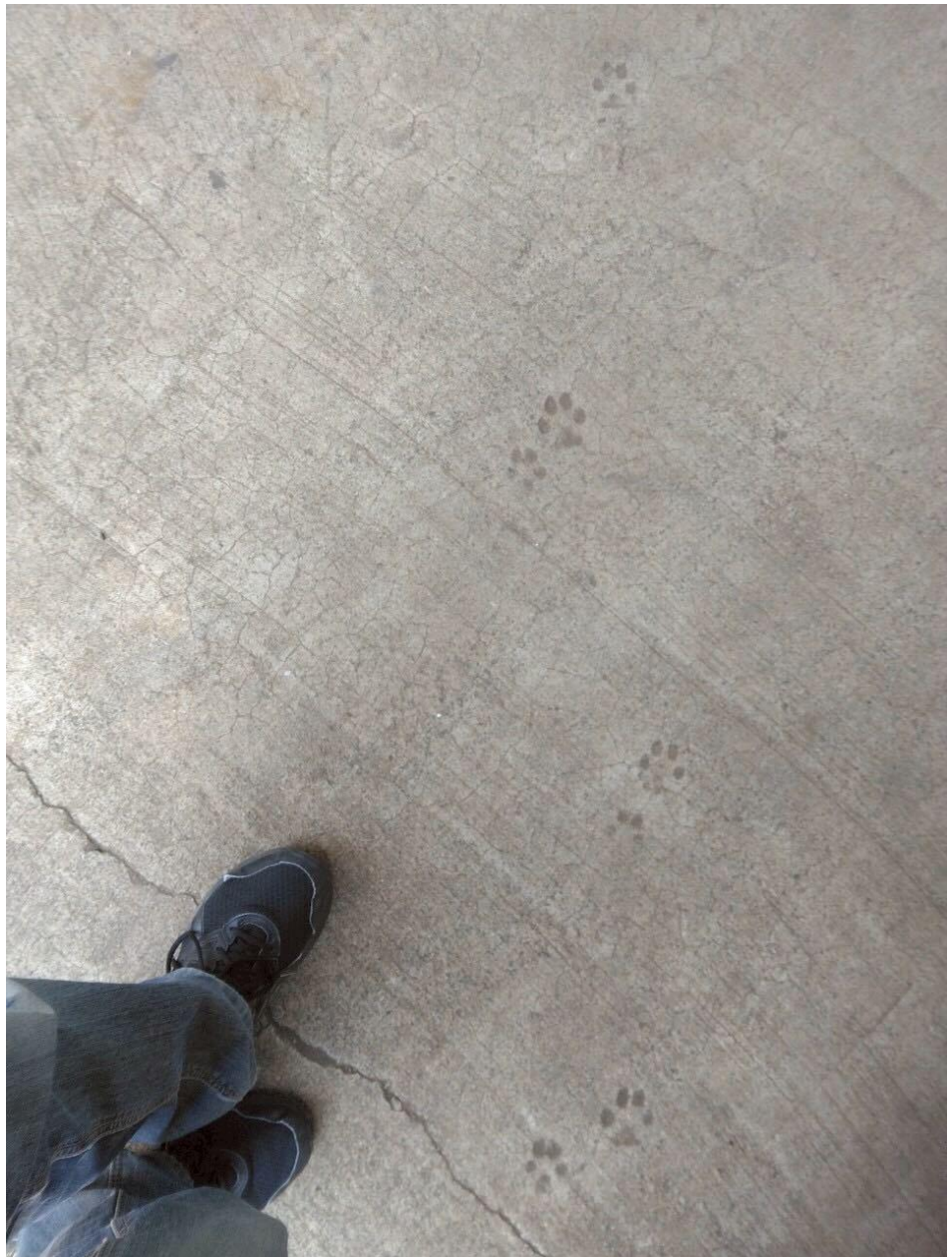
「うるせえなあ。」

男はさらに代田を睨みつけ、その後、運転席の西井に視線を向けた。西井がぎょつとする。

「俺は、お前と話したいわけじゃねえ。こいつと話してんだよ。」指で窓をドンドンと突きながら、男は西井にも聞こえる大きな声で言った。

「俺は、こいつとバトルさせろつつてんだよ！」

代田と西井は二人揃って驚愕した。



## Darker Darker Darkest

### ナ・パーム焼き炒飯

神はアブラハムに言った。

ハイウェイ六一で息子を殺せ。

「Tyin to create a next world war ♪」

聞こえるのは、調子はずれで下手っぽいな歌声と装甲車のエンジン音。ここ二時間ばかり、ずっとこんな具合だ。私は心底どうでもいいのだが、もう一人の兵士、ホールは違うようで、

「おいフォレスト、いい加減、その意味不明な歌をやめろよ」

「He found a promoter ♪.....なんと、ボブ・ディランの名曲だぞ」

「知らねえよ、せめて意味の分かる曲にしろって」

「うっせーなあ。仕方ねえ——ぱっぱら——ぱっぱら——ぱっぱら——」

我らが音痴のフォレスト君は、クラシックらしき曲を高らかに口ずさみ始める。

照りつける太陽、ジャングルクルーズにはうつつつけの日。見渡す限りのコンクリートの密林、アスファルトの大河。亀の甲羅に三対の車輪を装着したような形の装甲車が、我々の船だ。

車内の兵員室はエアコンが弱く、ドライバー以外の皆は屋根の上に座っている——運転席のエアコンは優秀で、ドライバーだけは快適らしい——。これでは何のための装甲だか分からないが、まあ、蒸し焼きになるよりは撃たれる方がマシだ。

死ぬことに変わりはないが、熱中症なんてダサい死に方は流石にゴメンなのである。

亀の甲羅の上には口径三〇ミリの機関銃座やら各種センサー類がゴテゴテ搭載されており、我々三人が座るともうぎゅう詰めだ。

『あんたら、そろそろ周りを見ておいてくれよ。もうじき警戒区域に入る。おいフォレスト、ディランの次はワーグナーかよ——歌ってないで、対空センサーの上からどけ。ドローンが飛んで来て全員吹き飛んだら、お前のせいだぞ』

ヘッドセットから聞こえるのは、運転席のフィッシュバンの声。屋根の上の三人は、えっちらおっちら、様々な装備品が

ブレイトキャリア

ゴテゴテと装着された防弾ベストを着る——ブレイカリの通気性は最悪で、極力身に着けたいとは思わないのだ。

「全員、警戒態勢に入れ。偶発的な戦闘に備えろ」

私は——やる気がないのを隠そうともしない声で——号令を出し、ブレイカリのポーチから取り出した弾倉をライフルに叩き込む。

パブでしこたま酒を飲んだ私は、どのようにしてホテルに戻ったのか覚えていない。そのホテルからどのようにして連れ出され、ニューヨーク支店に向かうタクシーに詰め込まれたかについてもだ。首筋のチクリとした痛みは、誰かがアルコール分解酵素を注射したためだろう。

誰かがホテルの部屋に押し入り、私にシャワーを浴びせ、ヒゲを剃り、仕事着を着せ、アルコール分解酵素を投与した上でタクシーに放り込んでくれた——毎日こうなら、楽なのに。

「休暇中のところ、急に済まない。本社の方から、急ぎの仕事が回ってきてる。君を名指しでね」

課長に促され、応接室に向かう。

「いいですよ、いつものことです。それに休暇といっても、飲んだくれる以外には、何もないですから」

しかし今回ばかりは、「いつもの」ような任務という訳にはいかなかった。

応接室には、三人の人間が並んで座っていた。名乗りもせず、右端に座したハゲメガネが切り出す。

「エステベス君だな。君は特殊執行部門の一員だったようだが」「サンディエゴ降下作戦他、数々の特殊任務に従事……。社の

公式記録には残っていないが、南米などでの強引な営業にも関

暗殺任務

与したそうだが？」

これは、中央に座った腹黒そうなおばさんの発言。

「お答えは控えさせていただきます」

「だろうね——さっそくだが仕事の話をしよう。受け取れ」

腹黒の目配せで、秘書らしき左端の若い女が書類を取り出す。社の人事資料だった。知らないおっさんの顔写真と、諸々のプロフィール。

「この男を知っているかね。彼の名はブラント。現在の役職は総務部特務課課長」

「ああ、お名前だけは。我が社の特殊執行部門の父。優秀な企業戦士……」

「だった」

おばさんは溜息をつく。ハゲメガネに頷く。緊張した顔つきで、ハゲメガネが話始める。

「現在混戦地帯にあるミネソタで部隊を率いていた彼は、社に背いたのだ。先週、突如として本社に辞表が送付されてきた。以後、部隊ごと消息を絶った。特殊な仕事に関わってきた男だ、彼は社の機密を知り過ぎている。文字通りの終身雇用という契約だ——退職を認める訳にはいかん。彼を探し出して連れ戻す、それが君の仕事だ」

ハゲメガネのデコは、冷や汗で光っている。おばさんが話を次ぐ。



「彼はもう高齢だが、サイボーグ化によって、若々しい心身を保っている。昨年の健康診断でも、認知症の兆しは認められなかった。これは私見だが——彼は狂ったのだ。半世紀以上も社に命を捧げ、戦場の狂気を目の当たりにしてきた男だ、精神を病んだとて、不思議はない。君が連れ帰ったら、彼は窓際職で余生を過ごすことになるだろう。イリノイまで空路で向かった後、そこからは六一号線を陸路で北上しろ。イリノイ以北は競合他社の対空陣地が針の山だからな。装甲車を手配してある」

そういう訳で、私は今、装甲車に揺られてミネソタに向かっている。ニューオリンズからミネソタまで、北米大陸を南北に縦断する旅路だ。

投棄されたゴミ山の中、律儀に千以上もの古い電話機だけを積み上げたピラミッド。

仲良く並んで色とりどりの靴紐で首を吊った、四〇もの死体。太陽の下、プラスチックの椅子を並べて戦闘を見物する住人たち。ときおり流れ弾で誰か死ぬと、他の連中は笑い転げる。

「これは……。俺たちはどこに向かっているんです？ この先、一体何が待ち受けてるってんです？」

フォレストの疑念には答えず、私はただ、路傍の死体を見つめる。その眼窩の中から、見つめ返してくるムカデ。装甲車部隊の彼らには、今回の任務の内容は告げていなかった。彼らは

ただ、私を目的に連れて行ってくれさえすれば、それでいいのだ。

「何の仕事だか知らないけど、このまま北上すれば、俺らもいつかあの死体みたいになっちゃいますよ」

六一号線沿いは、端的に言って狂っていた。戦火が、そうさせたのだろうか。

散発的に発生する戦闘や暑さも相まって、フォレストにはもう音痴に歌い上げる気力もない。このあたりは、数十年前まで寒かったらしいが。今では信じられない。

私はブラントを直接は知らなかったが、彼は我が社の特殊部門の父であり、つまり私の先人であった。彼が作り上げた社内試験や研修プログラムを経て、私は特殊戦の道へと足を踏み入れたのだから。この職は私にとって天職であり——私の今の人生は、彼のおかげとも言えよう。彼は私の父といっても過言ではない。

北上しながら、何度も人事資料を読み返した。数十年続くこの北米内戦のごく初期のうちから輝かしい業績を挙げ、本社に転属になると特殊部門立ち上げに尽力。その後、再び現場に戻る道を選んだ。彼は、現場で戦う企業戦士の鏡のような男だった。

セントルイスの廃墟地帯に入ったとき、フォレストが狙撃さ

れて死んだ。暑がつてプレキヤリを着ていなかったのが、仇となった。

撃たれた瞬間、狙撃だとは知覚できなかった。しかし経験と勘が、それが狙撃だと私に直感させた。

ビューンという風切り音と、顔にかかるヌメツとした液体。速やかに私は、装甲車の屋根から転がり落ちる。やがて聞こえる、ばーんという微かな銃声。弾着からおよそ二秒、狙撃手との距離は六〇〇から八〇〇メートル程度だ。

「フィッシュバーン、前方に機銃掃射。目標、前方およそ七〇〇の廃ビル群だ」

屋根に乗っていたもう一人、ホールはすっかり取り乱し、

「エステベスさん、早いとこ引き返しましょうよ！ 何の仕事だか知りませんが、こんなとこ、死体と敵ばかりだ！ 他にはなにも、ありやしない」

私は彼の頬をはたと、

「黙れ、ホール。このまま装甲車に随伴し、敵歩兵の接近を警戒しろ」

グレネード

私は小銃と擲弾を掴むと、廃墟の街並みに飛び込む。

ホールの言う通り、確かにここには何もないかもしれない。ブラントとて、既に死体になっているかもしれない。

否。

生きていてくれなくては困る。偉大な父は何を見、何を思い、いかにして辞表を出すに至ったのか。それを彼の口から聞きただすまでは――。攻撃者が何者だろうと、何の目的があるうと、そんなことはどうでもいい。立ち塞がる者あらば、実力を行使し排除する。それだけだ。

狙撃者が潜むと思われるビルに、迂回して側面から接近する。一階裏口から入ってすぐ、ワイヤートラップが仕掛けられているのに気づく。間違いない、この上だ。ワイヤーを切り階段を駆け上ると――発砲音。ホールの奴を狙ったのか？

奴がいるはずの階に踊り出るや、擲弾をぶつ放す。久しぶりに、滾る戦いだった。

「おい、あんたらパンタノ社の人間か？」

「いや、もう違うんだ」

狙撃兵との戦闘から二日後のことだった。我々は、遂にブラントの部隊を捕捉する。

「社からの遣いだ。課長に会わせてくれ」

車にホールとフィッシュバーンを残し、私は若い兵士が案内する後について行く。私の背後を固めるように、更に二名の若者が続く。一目で分かる、皆優秀な特殊作戦要員だった。言わば、ブラントの息子たち。つまり私の兄弟たちだ。

「本社に、辞表は送ったはずだが？ 社から一体、何の用かね」

「とぼけないでください、分かっているはずだ」

彼は人事資料の写真よりも、遙かに若々しく見えた。滲み出るオーラが、そう見せるのだろうか。

彼がいるのは、何らかの官公庁舎だったらしき建物。周囲には機銃座やセンサー類が数多く設置され、即席の野戦陣地と化している。対ドローン用の対空設備まであるのだから、驚きだ。ここを陥落させるには、かなりの戦力が必要だろう。

「ふむ。君の仕事は、私の拘束か」

「そうです。生かしたまま捕まえ、本社までお連れします」

「断る。帰りましたえ」

「そういう訳にはいきません」

正直なところ、私は彼に感心してしまった。彼には一切の、狂気の影が見えなかったのである。戦場で心を破壊された同僚たちは数多く見てきたが、ブランド課長は、彼らのどれとも違う。全くもって理性的に見えた。

彼はそんな私の心を見透かしたかのように、

「おおかた、社の方では私が狂ったかのように考えていることだろう。残念なことに、私は完全に正気だ。狂っているのはむしろ、奴らだ。君も、特務なのだろうか？ 私の息子ならば私の心が理解できるはずだ」

若い特務たちが彼につき従いともに脱走した理由が分かる。彼に、心酔しているのだろう。

「おつしやる意味が、よく分かりません」

「君は、戦いが好きだろ？ 私もだ。私の『息子たち』も、皆そうだ。君が例外であるはずはない」

「……」

「好きに戦い、理不尽に死ぬ。それが我々のあるべき姿だ。だが今や、戦いは経済活動の一環に過ぎない。利潤追求システムの、歯車の一つへと組み込まれてしまっている。資源から製品を製造し、流通させる。そういった商売と、何ら変わらない——」

「……」

彼は少し咳き込むと、言葉を続ける。サイボーグ化によりある程度の若さを保っているとはいえ、社を離反してしまった以上、機械部品を良質にメンテナンスすることは難しい。

「だが戦いに喜びを見出すものであれば——経済的な数字のためなどではなく、自らのために撃つべきだ。戦いを、自らの手に取り戻すべきなのだ。社で特殊部門を立ち上げたのは、私の誤りだった。私のような人間が活き活きと生きるために思い立ち上げたのだが——結局のところ、強力な駒を手に入れた社の利潤追求の姿勢は加速し、我々はその急先鋒となった」

「……」

若々しいオーラとは裏腹に、実のところ、彼はもう長くないのかもしれない。

「帰りました。でなければ私は、君を殺さなければならぬ。奇しくもここは、六一号線の北端だな。知っているかね、ボブ・ディランの曲。歌詞はこうだ、『神はアブラハムに言った。ハイウェイ六一で、息子を殺せ——』。結局のところアブラハムは、聖書では息子を殺していない。ディランの曲の方では——結末は分らず仕舞いだ」

「……分かりました。明日、また来ます」

「来なくていいぞ。帰って、本社に伝えたまえ。我々は、この地に兵士の理想を打ち立てると。我々が生きるべき道はただ一つ、混沌の地獄なのだ。システマチックにコントロールされた戦争市場などでは、決してない」

彼の主張する内容は、常識的に考えれば完全に狂っているのだが、しかし。

であるならば。私は、彼を、殺したい。殺さなくてはならない。

狂っているのは、世界か、私か、彼か。そんなことはもはや、どうでもいい。イデオロギーも、利潤も、そんなことはハナから、どうでもいいのだ。実力を行使し、一人の男を排除する。それだけだ。

センサーの目を掻い潜るのは容易だった。なにしろ、それを仕掛けたのは私と同じプログラムで訓練された連中。どこに穴

があるのか、一目で分かる。

「おはようございます、課長。昨日言った通り、また来ました」  
扉の陰から飛び出し、そう言うが早いか、彼の胸にナイフを突き立てる。

「こんな不意打ちを喰らうなんて、老いたものですね、課長——いえ、親父。全盛期のあんたなら、私なんて返り討ちだっただろうに。後は任せてください」

彼が倒れてしまわないよう、その背中を左手で、しっかりと支える。結末が分からないのなら、イサクがアブラハムを殺したつていいじゃないか。

「兵士の王道楽土を築くなんて、今のあんたじゃ無理だ」

彼の目は見開かれ、私を見つめる。にやりと笑い、

「ああ、地獄だ！ 地獄だ！」

彼の最期の言葉だった。

物音を聞きつけた兵士が駆けつけ、私に銃を向けるが——状況を理解し、すぐにそれを下す。

「ブランド氏は死んだ。後は私が引き継ぐ。ありったけのナパームを装備して、出発するぞ」

「どこにです？」

私はナイフの血を拭くと、

「ハイウェイ六一だ。この大陸を南北に繋ぐ地獄を、兵士の王道楽土を作るぞ」



## Fuck the 自称表現者

去私 a.k.a 長岡雅也

特別であることを願った瞬間に、その表現はすべて嘘になる。

誰かにああしろこうしろ言う割に、実際にはそう在ってほしくないのだから。何十年後の世界でまったく味のしない、殊更取り上げられるのこのないようなテキストを目指さなければ、それは独り善がりで終わってしまう。幾分か時間が経って、それでも君の才能がもてはやされるようなら、それは君のザイオンとの決別に他ならない。

何者でもなくなった自分を受け容れる準備を淡々とする。

何者かであるうちは、本当のことなど決して見えやしない。

君は見せられ、聞かされ、言わされ、満たされ、そうやって生かされている。それを知らない振りをして闇雲に誇るひとたちに嫌気が差した。なにがレペゼン、何かの文脈に支配されていることがそんなに嬉しいのか。

ラッパーなんてやめてしまえ。作家なんてやめてしまえ。表現者なんてやめてしまえ。そうでなければそれをしてはならな

いというわけではない。

すべてから抜け出して、ただひとりの人間としてそこに在って、それでも筆を執る機会に恵まれたとき、本当に記述されるべきことが理解される。

その箱の中で自らの不幸にあぐらを掻いて、言うに事を欠いて、理解されたくもない人生を騙るのはもうよさないか。身に降りかかる理不尽を誰より都合よく捉えているのは君たちじやないか。何度それを肥やしにすれば気が済むのだろう。

己を喪うことに怯えるな。

我を忘れて、自分であることの価値を見失ってやつと辿り着ける。人間らしさと自分らしさの混同が目立つ。君が君であることを誇り、尊びたいと願うなら、やはりいちど君らしさというものを取り外さなければならぬ。

くたばってくれないか自称表現者諸君。君たちが無責任に振り蒔いた自由のせいで、また誰かがそこから遠ざかった。また誰かが不幸になった。誰かを救いたいと願った挙句、選んだのは結局そのトラウマを独り占めすることだった。誰にも理解される筈が無いと。

言い得ることを言いきらぬ術学者たち  
あなた方の温かみ 逆さまに空回り

初めは西に風が吹いた

気づいた時には手遅れだった

語り手が悲しげに告げた真実

誰にも言わずに舟に乗り込んだ

掌から零れ落ちた幸せが

せめてそこに降り積もることを

堕ちる星にて佇んだ君が

せめて最後に悲しまぬことを

身を震わせる甘美な裏切り 心の何処かでそれを期待し

虚実構わずどちらも浚って 長い夢の後また君に

求める限り表現は死なない 疑い続けて今を生きなさい

俺の話は散々したんだ 君の話を聞かせちゃくれないか



あとがき (作品掲載順)

白砂糖

「叶わなかったこと」は最高に美化されがちな気がします

明倉有斗

北九州に落としてきた右手の人差し指のネイルチップ、元気でやってるかな

霧雨 蒼

梅雨が短すぎるので逆さてるてるを作ろう

菅原きらり

村のモチーフは地元です。良いところです。

d f g

バームロール+パンの耳↓たい焼き

宵蘭

ここまでは君に貰った前日譚

海葵

幸もす

午睡乃 ユメ

ドッペルゲンガーよりは良い性格してたいよなー

犧 まい

最も不快なのは生の実感だ。それは夢を見ているのに気づくのと全く相違ない。

わろん

腹減ってるのに食べたいものがない贅沢

カール

二郎系は危険

ナパーム焼き炒飯

ネトフリさん、どうかアーケイン第三シーズンやってください……。

去私 a.k.a 長岡雅也

ギリ七夕





## 編集後記

わおん

みなさん、こんにちは。こんばんは。今回も編集を務めました、わおんです。『ラピスラズリ 2025 七夕号』を読んでくださりありがとうございます。今回の作品達はいかがだったでしょうか。新入部員の作品達もちょうほらあります。ありがたい限りです。

さて、今号、名前に「七夕」とつきますが、発刊日が七月七日を大幅に過ぎ、八月に突入しております。ですが、皆さん、だからといって今号が七夕号を名乗っても全く問題ないのです。

皆さんはそもそも七夕がいつかご存じですか。そうです。旧暦の七月七日です。仙台では旧暦に合わせて八月六日から八日にかけて七夕のお祭が開催されます。梅雨が明け、カンカン照りが続き、美しい夜空が見られるこの時期こそ、真の七夕なのです。文芸部セピアは文化的な部活ですから、八月の七夕に合わせております。ゆえに、決して、編集作業を先延ばしにし、発刊が遅れに遅れたというわけではないのです。断じて違う。織姫と彦星に誓いましょう。

申し訳ございません。言い訳です。発刊が遅くなったのは全て私のこの怠惰のせいでございます。ぶっ飛ばしてください。最近、毎日猛暑が続きますが、皆さん体調を崩したりしていませんか。まだ八月に入ったばかりでこの暑さ。いったいこの先どうなることやら。水分補給、こまめにやっていますか。私は一リットルのスポーツドリンクを毎日片手に過こしております。どでかいペットボトルを片手にズシズシと歩いておりますので、すれ違った人々の視線が少し痛いんです。実は最近ポカリの方がアクエリアスよりお値段が高いことを発見しました。違い、あるんですね。私はその時の気分です。ポカリの時は少し贅沢な気分を味わえます。水分補給大事ですよ。喉が渴いたときには遅いと言いますが、全くその通りで、何回かぶっ倒れそうになりましたからね。皆さん熱中症にはくれぐれもお気をつけください。

というわけで、ここまで読んでくださった皆様、寄稿してくださった部員の方々、誠にありがとうございます。次は紫熊号。次こそは遅刻せず、気合いを入れて皆さんの目ん玉飛び出すくらいクオリティを目指すので、どうぞご期待ください。

ラピスラズリ

2025 七夕号

【発行日】2025年8月6日

【発行者】文芸部

【本誌使用写真】部員撮影

## ☆文芸部(旧文芸サークルセピア)☆

【活動日】毎週月・金 18:30~20:00

【活動場所】全学教育棟2階 C211教室

【X(旧Twitter)】@Sep\_1A

【Instagram】@bungeisepia

※Zoomにて活動している場合もあります。

年に4回、『ラピスラズリ』(本誌)を発行しています。

毎週の部会では、部員の作品の批評会や、リレー小説、シャッフル短歌や俳句や言葉遊びなどのレクリエーションを行っています。

創作をやってみたい方は、小説・短歌・俳句・詩・絵本から評論まで、ジャンルフリーに募集中。

もちろん、自分では創作をやらない、一介の文学好きも大歓迎です。

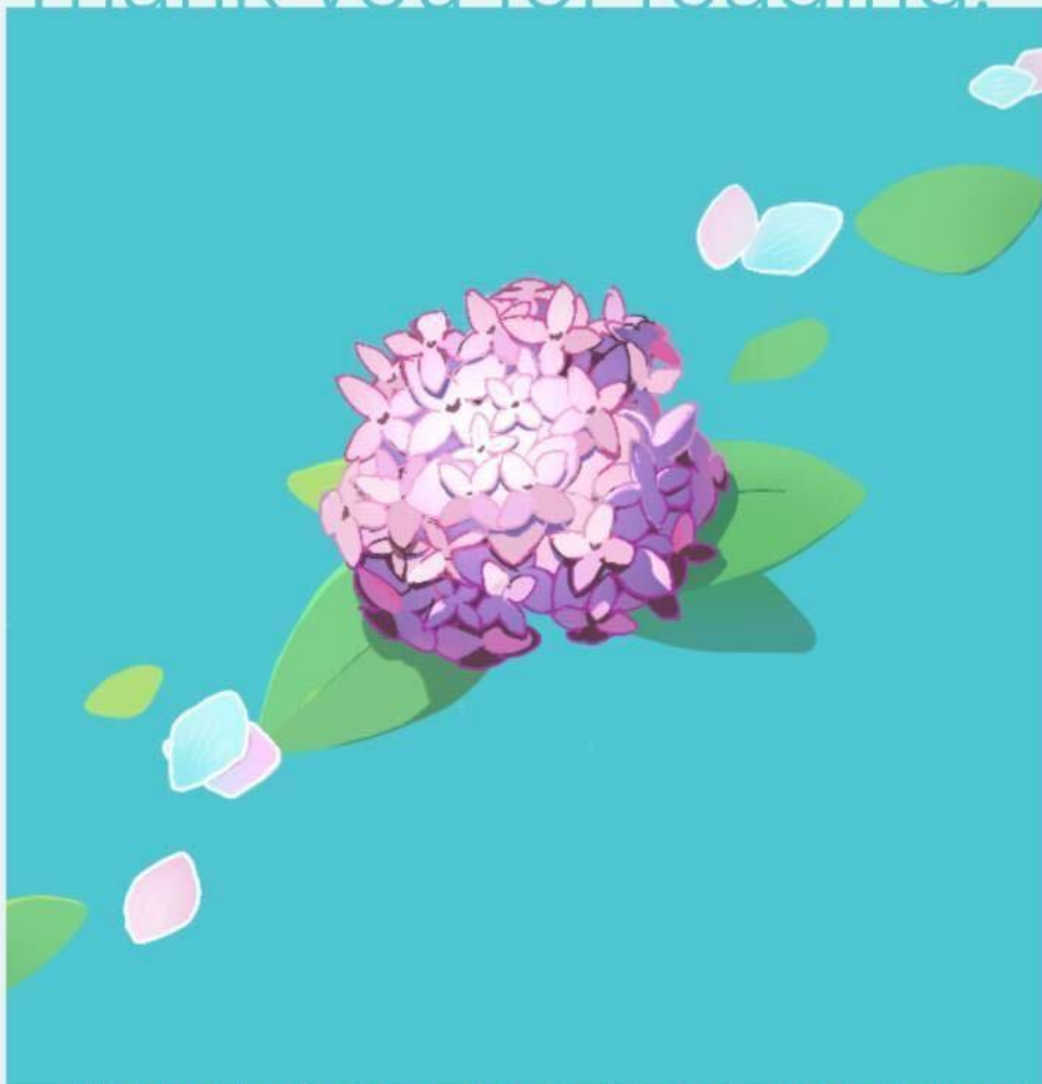
「言葉について熱く語りたい」「好きな本についてまったり語りたい」「暇で仕方がないのでなにか面白い本を教えてください」……あなたのそんな秘めたる望みが叶ったり、叶わなかったりします。

最新情報はX(旧Twitter)&Instagramにて公開中。質問等はDMで。

見学お待ちしております。



Thank you for reading.



Thank you for reading.